

艦娘百景

亜矢子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

十人十色。

色々な艦娘が色々なことを考えて生きています。

色々な深海棲艦が色々なことを考えて生きています。

色々な人が色々なことを考えて生きています。

そんな色々な小さな切れ端を集めて作るパッチワーク。

なんてできればいいな、と思います。

目次

歪（後）

アメシストの瞳	1
アメシストの瞳 補遺 Z a r a	
16	
アメシストの瞳 補遺 瑞鳳	19
呉艦娘寮にて	25
いつかどこかの海の上	33
田中巨摩という男	37
田中巨摩という男 密談	50
留鳥	55
招魂（前）	67
招魂（後）	82
歪（前）	95

アメシストの瞳

砲撃だろうか、爆撃だろうか。

地震のような揺れとともに我が執務室はみしりと軋み、照明が不規則に瞬く。

成程彼女らはずいぶんと近いところまで侵攻してきているようだ。

ここももう落ちるな、と独り言つと、すぐ後ろからええそうねと返事がある。

振り向けば、我が長年の相棒が微かな笑みを湛え私を見つめている。濡れ輝くその瞳はアメシストのように美しく、湖水のようにただただ静かに私の姿を映しだしていた。

撤退命令はどうに出していた。これは私の司令官としての最後の作戦であり命令である、命を無駄にするな、再起を図れ、総員整然と撤退せよ、と。皆、私の意図をよく理解し、速やかに隠密に事を成し遂げた。話に聞くキス島撤退作戦ですらここまでの完璧さではなされなかったであろうと考えるのは身内最良が過ぎるだろうか。これも日頃の厳しい訓練の賜物と我が部下達を誉に思う。あとは私自身が彼女らと直接対面し、

この命と引き換えにつまようじほどの楔の一本でも打ち込むことができれば作戦は完遂、のはずであった。だが、最後の最後に一名の命令違反者を出してしまった。まったくもって遺憾である。

そう伝えると、相棒は笑みを一層深めこう返してきた。

「そうね、でも命令違反者はわたしじゃなくて、あなた。総員撤退と言ったのにあなたはまだ残っているのだもの。わたしはそんなあなたを連れていくためにここにいるだけ。」

なんともひどい屁理屈ではあるが、屁理屈なりに筋は通っているところが小気味よい。彼女達は着実にここに迫っている。相棒を安全に逃がす一手を手繰り寄せるべく私の頭脳が高速回転を始める。が、次に相棒が発した言葉を聞き、すぐにその思考を放棄することとなった。

わたしはいまでもはつきりと覚えている。あなたは、友にあれ、伴にあれとわたしを喚び寄せた。だからわたしはその最初の命令を最後まで守り通す。こんなにも忠実な部下を持つて、あなたは本当に幸せな司令官ね。そうでしょう？

なんともなんとも実に小気味よいではないか。成程これは私の望みであったか。

しばし考えた後、よかろう、と私が正面に向きなおれば、相棒はまるでいつも通りに私の後ろに立った。

背中が少し暖かい。そんな気がした。

我が要塞の防衛機構がひとつずつ着実に突破されていくのがわかる。

たいしたものだ。物量だけではない、彼女らは随分な手練れ揃いのようだ。感心している、あなたは……と相棒が囁くので続けたまえと先を促す。あなたは彼女達に憎悪を抱いているかしら、厭わしく思っているかしら、だから戦うのかしら、などと言う。

興味深い問いかけである。こういう考え方はどうだろう。我々は各々が生物群集の構成要素としての役割を果たしているに過ぎない。群集内では各要素の個体数には調和が必須である。一つの種が突出した拡大を見せ調和が乱れば、必ず揺り戻しが起こる。それが今の我々の闘争状態であると言えよう。我々の乗る天秤はいまだ大きく揺れ動いているが、いずれ必ず調和を見出す時が来ると私は考えている。必要なのはただ調和である。

ちつともわからないわ。あなたの悪い癖ね。

ふむ、そうだな。つまるところは、だ。私個人の感情としては、むしろ彼女らの在り様には大いに好感を持っているのだがね。落花情あれども流水意なし、とでも言おう

か。私は振られ続けてついには今日、引導を渡されるといわれた。

わかった。じゃあわたしも彼女達を好きになる。わたしはあなたの艦だもの。嬉しいことを言ってくれる。まったく君は私には過ぎた相棒だな。

とりとめのない会話を交わしていると、鈍い振動とともに我が執務室が断末魔の如き軋み声をあげた。最後の防衛機構が突破されたようだ。

さて、いよいよ我が一世一代の大勝負の始まりである。私の最後の求愛が彼女らの心を射止められるよう、そこで祈ってはいくれないか。

そういうことならわたし、今日だけは彼女達の側になりたかったって思うわ。

そう、思うか。

ええ、本当に。

ゆっくりと椅子から立ち上がる。慣れ親しんだこの椅子に座ることはもうないだろうと思う。お客さんが到着したようだ、と言うと、相棒は静かに私の前に移動し護衛体制に入った。まったくもって私には過ぎた相棒だ。この娘が生きられる可能性をわざわざかなりとも残しておくべきであると判断し、彼女に命じた。

武器など構えていては君も私もたちまち蜂の巣にされるだろう。武装を解除して下

がつていなさい。

しばしの間をおいて、はい、とやけにしおらしい返事が聞こえた。

「やあ艦娘諸君、深海要塞司令部へようこそ。君たちを歓迎しよう。」

なんだ、この男は。

私は若干の混乱と躊躇を覚えた。何故ヒトがここにいる。何故ヒトがそちら側にいる。

この要塞の集中管制室と思しき部屋へ突入、即時に散開した私たちの前で、士官のよ
うな制服を身に着けた長身瘦躯の男が両腕を広げにこやかに言葉を発している。君た
ちを歓迎する、と。その男は左手に持った白いハンケチをゆるゆると振っている。降伏
だともいうのか。

「初めまして、艦娘諸君。私はこの要塞の司令官である。私には君たちで言うところの
名前というものがありません。名乗りたくとも名乗れぬ。失礼の段ご容赦願いたい。」

その男は続けてこう言った。

「さて、この戦は君たち艦娘の勝利だ。我々にはすでに戦う意思も力もない。だからほ

んの少しだけ、時間をくれないだろうか。なに、最後に君たちと話をしてみたくてね。それだけだよ。」

ちらりと周囲をうかがえば第一艦隊の皆も警戒しつつ戸惑いを隠せない様子だ。それもあたりまえだろう。いざ決戦だと意気込んで来てみれば、司令官を名乗る謎の男が投降の意を示し、話をしたいと言う。何もかも初めて尽くしではあるが、完全な意思疎通が可能な深海勢との遭遇もそれとの対話も、過去記録がない。敵情を知る貴重な機会かもしれない。あの男が人でありながら敵についている理由も気になるところだ。さてどう動くべきか、と考えながら副官の扶桑の様子を窺う。

その時私は、男の振る白いハンケチの向こうに、同じくらい白い色をした女の顔を見た。見てしまった。アメシストの瞳を持つ深海棲艦、姫級。微かな笑みを浮かべながらこちらを見つめるその顔は。その顔は…。

陸奥を。私のたつた一人の妹を。沈めた。女だ。

「貴様はっ、貴様が陸奥をっ」

私は我を忘れた。軍人としての自分を忘れた。第一艦隊旗艦としての自分を忘れた。長門という艦娘を忘れた。何もかも忘れて、妹を失ったただの姉が残った。私の副砲が妹の仇へ瞬時に狙いを定める。駄目ですっ、長門さんっ。扶桑の声が聞こえる。何が駄目なものか。狙いは完璧、必中ではないか。司令官を名乗る男が妹の仇へ飛び掛かり、

庇うように覆いかぶさる。おかげでやや照準がずれるが構うまい、この近距離だ。砲身の指す先で私をただ見つめる女と目が合う。アメシストの瞳。なんだ、その目は。敵意もなく、恐怖もなく、諦念もなく。なんだ、お前は。やめる。私をその瞳で見るな。やめる。やめる。やめる。やめる。熱を帯びてゆく私の頭の中で、カチリ、と小さな音をたて撃鉄が下りる。

轟音。炸裂。

奴らが諸共吹き飛ぶ様が、スローモーションのように私の脳裏に残像を残した。

「ははは。やった、やったぞ陸奥。私は、私が、お前の仇をとったぞ。陸奥、見ていたか、陸奥っ。」

脱力し膝をついた私は、止めなさいっ、と飛び掛かってくる扶桑に簡単に組み伏せられる。

やってやった。妹の、陸奥の仇を討った。

嬉しいはずなのに、私の頭に浮かぶのはただただ透き通ったあのアメシストの瞳ばかり。

いくら叫んでも、陸奥の返事は聞こえてこなかった。

今にも消えそうな小さなぬくもりを胸に感じ、目が覚めた。

我が全身が盛大に苦痛の声を上げています。これは想定より少しばかり早く海に還ることになりそうだと考えながら喧しく鳴り響く痛覚を遮断すると、私は目を開けた。腕の中の我が相棒も満身創痍、虫の息だ。もとより私の体一つで戦艦の艦砲射撃を防げるはずもない。即死でないだけでも幸いというものだ。相棒を抱きしめる形で固まっていた腕の力を緩め、わが胸に収まるほどの小さな頭をそつと撫でる。意識は戻らずとも命の灯はまだ消えていないようだ。少し安堵した。それにしても。先日相棒が沈めた陸奥がこの長門の妹であったとは、なんとも因果な巡り合わせではないか。そう考えながら私はもう一度、相棒の頭をそつと、そつと撫でた。

あれは扶桑君か。誰か応急処置をつ、という切迫した声が聞こえる。小さな艦娘がこちらへ駆けつけてくるが、私たちの惨状を見ておろおろとするばかりだ。致し方あるまい。どうやら私のような完全に人型の深海種に遭遇するのも、それが傷つく様を見るのも初めてのようだ。情報と感情の処理が追いつかないのだろう。

「君は……皐月君、かな。救命措置、感謝する。だが見ての通り、我々はもう助からんだろう。」

実際、私と相棒の下腹部には風穴が開いているし、おまけに私は両下肢が吹き飛んで

しまっている。大破の域を超えている。人間だったらとうに絶命しているような怪我だ。

「あの、ボク、あの、あの」

大分動揺しているようだ。大きな瞳にあふれんばかりの涙をためている。優しい娘じゃないか。

「心配ない、こう見えて私は深海種なんだ。人ではない。君たちは相争う競争を打ち倒しただけ。決して君たちが守るべき人間を傷つけたのではない、いいね。だから君は、大丈夫だ。」

「でも、でも、脚が。血が。ボク……」

ついには涙が零れ落ち、床にへたり込んでしまう。見た目は人と変わらない、言葉を交わすことだってできる。そんな相手を殺す側に立つことは、この娘には辛すぎるか。これ以上の対話は無理だと判断し、他の艦娘たちをひととおり観察する。

放心している長門を取り押さえながらも、扶桑は私から目を離さない。彼女がこの艦隊の参謀に違いない。呆然とこちらを見ている重巡はザラだろう。女の子らしい優しさと感受性の強さを感じる。妹のポーラは武器を下ろし、感情の見えない瞳でじつと私と相棒を観察している。突発的な状況変化にも感情のコントロールを失うまいとしている瑞鳳はよい空母だな。空母は抜きんでてクレバーであるべきというのが私の持論

だ。

それぞれの命がそれぞれに、眩しく輝いている。
なんとも美しいものだ。そう思った。

事情が事情とはいえ、長門さんの旗艦らしからぬ行動に心の内で舌打ちをひとつ。武装を持たず白旗を振る相手を一方的に攻撃するなど言語道断です。そう考えていると、皐月さんとあの「司令官」の会話が耳に入ってきました。

こう見えて私は深海種なんだ。人ではない。

恐らく本当のことでしょう。あの惨状で即死しないばかりか意識を保っているなど脆弱な人間ではありえない生命力ですが、深海種ならばそれも領けます。深海種にそのような完全な人型の形態があるとは驚きの一言。しかも私たちの言葉を流暢に操り完全な意思疎通ができる。司令官、と言っていたがあの人型男性形態は変異種なのか、複数個体が存在するのか、男女があるということはあるかは交配可能なのか。謎が謎を呼びますね。惜しいことをしました。あれは生かしてもつと情報を引き出すべきでしたが、もう長くはないでしょう。あの二体の周りには大きな血だまりができています。も

はや応急措置がどうこうという段階ではありません。ならばどう動くか…。

暴走した長門さんを組み伏せ瀕死の二体の様子を油断なく窺いながら、私の頭は忙しく働いていました。

「扶桑君、少し、いいかね。」

あの「司令官」から唐突に話しかけられる。ちょうどいい機会。できるだけ情報を引き出してみましよう。

「人は何故、我々を追い詰めるのだろうか。」

藪から棒に何を勝手なことを。いけないと分かっているながら頭に血が上るのがわかります。

「あなたたちが侵略してくるのでしょがっ。あなたたちがどれだけの人を、艦娘を殺してきたのかわかっているのですかっ」

「この戦争で我が同胞がどれだけ命を失っているか、君はご存じだろうか。」

話を逸らすな。お前らがいなければ、お前らが襲ってこなければ、誰が好き好んで戦うものですか。

「人は何故、我々の棲み処へ土足で踏み込んでくるのだろうか。」

「あなたたちが私たちを襲わなければ、私たちは戦いません。」

「そうだな。君たち艦娘はそうかもしれない。しかし人はどうだろう。彼らには陸わかがあるだろうに。陸で生きていけるだろうに。何故我々の棲み処を踏み荒らしてくるのだろうか。我々には、海しかない。深海うみしかないのになあ。」

私には返す言葉が見つかりませんでした。こんな話は聞かなければよかつたと思いました。

人が深海域に踏み込まなければ深海棲艦が人と戦う理由はない。

人が深海域に踏み込まなければ艦娘が深海棲艦と戦う理由もない。

彼はそういうことを言っている。

そんなの。そんなの詭弁ですつ。

そう心から言えたならどんなに気が楽だつたでしょう。

しかし、私の心に灯つてしまった一つの疑念は反論を許してくれませんでした。

この長い戦争は、深海資源採掘船団が深海棲艦に襲われ全滅したことから始まった、と聞いたことがあります。艦娘が現れるまでの間、人は海から駆逐され陸に閉じ込められていたといいますが、その間深海棲艦が陸上の民間施設を攻撃したという記録は見たことがありません。思い起こしてみても、私自身そういう経験をしたことはないのです。戦艦がいれば、鬼級がいれば、姫級がいれば、航空戦力があれば、いくらでもやれるだろうに彼らはやらない。戦いはいつも人と艦娘が出張つた先で起きる。今日のこ

の要塞戦のように。

そんな馬鹿なことが。

「我々を滅ぼしたならば、次は何処の誰と戦うつもりなのだろうな。人は。」

そう。次は、次は…。

そのとき艦娘わたしたちはどうなるのでしょうか。

私は深い、深い思考の深海うみへと沈んでゆきました。

腕の中の我が相棒が身じろぎした。意識が戻ったのだろう。

艦娘たちのおしやべりはもう十分だ。

残りの命は相棒との最期のひとときに。実に僥倖である。

ねえ、あなた。生きてるかしら。

ああ、君がなかなか目覚めないものだから肝を冷やしたよ。おかげで大分寿命を削られた。

お姫様の眠りは王子様のキスで覚ますものなのに。待ちきれずに起きちゃったわ。

それは悪いことをした。

ねえ、寿命。どのくらい残っているかしら？

あと5分も持てば上々、というところだろうな。血を失いすぎた。

そう。私も同じくらいかしら。私たち、お揃いね。

ああ、そうだな。

ねえ、あなた。両脚を、どこへやってしまったのかしら。

ああ、あれは存外薄情な奴でな。私を置いて先に還ってしまったんだ、海の底へ。

そう。そう、なの…。私たち、こんなところもお揃い：ね。

ああ、お揃いだ。うれしいよ。本当に。

私を一心に見つめる瞳から一粒の涙がこぼれた。

初めて見る彼女の涙は宝石のように煌めき、初めて拭う彼女の涙は陽だまりのように暖かかった。

月が、きれい……

そう眩き、彼女は静かに瞼を閉じた。

偕老同穴という。私ももう、死んでもいいだろう。

返事はなかった。

叶うならば平和な深海うみでもう一度。最期にそう願ひ、私も目を閉じる。

私の心は限りなく軽くなり、ついには空を舞う鳥になると、アメシストの瞳を探し飛び去った。

アメシストの瞳 補遺 Z a r a

静かにあつけなく、すべてが終わった。

悲しくて、辛くて、もうどうにも耐えられなかった。

涙が止まらない。私は両手で顔を覆いその場にしゃがみこんでしまった。

同じじゃないか、私たちと同じじゃないか。死にゆく二人の間には羨ましいほどに確かな愛情があった。私は死にゆく姫の姿に心を揺さぶられた。私もあんな風に愛してみたと思つた。私もあんな風に愛されてみたいと思つた。人と艦娘と深海棲艦と、敵と味方と守るべきものと。愛すべきものと、そうでないものと。何がそれを分けるのか、もうわからない。私たちはなんで戦っているんだろう。私の心は、愛憎は、溶けてまじりあい涙となり溢れ続けた。

ザラ姉さまザラ姉さま、聞こえてますかー、おーいー。

耳元で囁き声がした。ポーラが私を呼んでいる。急いで涙を拭つてポーラを見れば、眠たそうなウインクを飛ばしながらこんなことを言うのだ。

「泣きたいときは泣いてー、飲みたいときはー飲む。それが一番ですー。」
いつも通りだ。

あんなことがあつたのに、この子はまるでいつも通り。酒瓶を小脇に抱えているところまでいつも通り……。いや待つて待つて、思い出すのよザラ。出撃の時は提督に叱られ宥められお酒は降ろしていたはず。ならばこれはどこから…、と問い詰めればグラスとともに奥の応接に用意してあつたのだという。まったくこの子は。

「そーれーにー。ほら、いーいワインですよ。これを私たちと飲みながら、どーんなお話ししたかつたんでしようねー。司令官さんは。」

そう言いながら瓶をそつと回し、私にラベルを見せてくる。

A T A R A N G I P i n o t N o i r

夜明けの空という言葉を冠するこのワインは、新たな門出を祝うときなどに贈られるとても縁起のよいもの。彼と彼女は、私たちにどんな夜明けを見せようとしていたのだろう。そう思うと切なさで胸がいっぱいになる。悲しくて、やりきれない。一度は止まった涙がまた零れ出した。

「今日……であつたこと。司令官さんとお姫様のこと。ザラ姉さまは、忘れちゃいたい

ですか？」

そう言いながらポーラが真つ赤に腫れた私の目を覗き込んでくる。

駄目、駄目よポーラ。あの二人のことは絶対に忘れてはいけないと思う。

「じゃーあー。飲むしかありません。帰ってー、飲んでー、ポーラと二人でいーっぱいお話ししましょう。ね、ザラ姉さまっ。」

ザラ艦隊のー、ご帰還だー、おー。なんておちやらけながら私の手を引き前を進むポーラの背中が、いつもより少しだけ大きく見えた。

アメリストの瞳 補遺 瑞鳳

……この長門の砲撃により致命的な損傷を負った姫級深海種並びにヒト型深海種は23分後、相次ぎ死亡。遺留品なし。艀装を含む死体は死後速やかに溶解し消失。後にはわずかな水分が残るのみであった。

深海種二体の死亡後も、旗艦長門、副艦扶桑両名からの指示はなく、一四〇八、ザラ、ポーラ両名が独自に撤収開始の動き。これを受け旗艦副艦は指揮能力を一時的に喪失と判断し、瑞鳳が艦隊指揮を引継ぎ。同時刻作戦完了を宣言。第一艦隊撤収開始。以降会敵なし。

一八〇〇、第一艦隊六名、母港へ帰還。

——イ号要塞制圧作戦報告書 瑞鳳

「ふむ。なるほどわかった。瑞鳳、ありがとう。助かったよ。」
私の提出した報告書に一通り目を通すと、提督はそう言い大きなため息を一つつけた。

長門さん、扶桑さんというこの泊地の両エースが一時的とはいえ指揮能力を失ったこ

ともそうだが、私たちと完全なコミュニケーションが可能なヒト型深海種の存在。そしてなにより、あのヒト型深海種が語った言葉は提督に大きな衝撃を与えたと思う。

提督に報告書の取り纏めを頼まれた私は、1%の期待と99%の諦念を込めて、あの「司令官」が語ったことを余さず記載した。彼が所謂バイリンガルの存在であり、彼ら深海種には私たち艦娘やヒトに劣らない高度な精神活動と、私たちにはわからない独自の言語や高度なコミュニケーション方法があると推測されることも記載した。細やかな愛情をうかがわせる二人の死に際を見たとすれば、これはもはや推測ではなく確信だ。

そうして私は提督の次の言葉を直立不動のままじつと待つ。1%の期待を込めて。

「瑞鳳。」

「はい。」

「本作戦における君の報告書は機密文書に指定、非公開とする。また、本作戦において君たち第一艦隊が見聞きした姫級深海種並びにヒト型深海種に関するすべての情報を機密事項とし一切の口外を厳禁する。いいね。正式には追って通達するが、まずは君から第一艦隊の皆へ伝えておいてくれないか。」

ああ、やっぱりそうなっちゃうんだ。ポーラさんの言ったとおりだったなあ。

提督は忘れてはならないこと、皆でよく考えなければいけないことに蓋をして目を背

けた。あの司令官と姫級が命を懸けて伝えようとしたことを、握りつぶそうとしている。

心の内の諦めを見せないように気をつけながら敬礼すると、私は提督執務室をさつきと退出した。

私は見ていることしかできなかつた。だからこそただひたすらに状況を観察し続けた。艦載機を使ってすべての状況を見ていた。

だから、知ってるんだ。ホントは遺留品がひとつだけあったこと。ポーラさんが今も持つてること。

二人が亡くなったあと、へたり込んでしまっていた皐月ちゃんの元へ誰よりも先に駆け付けたのはポーラさんだった。彼女はそこで、小指の先ほどの大きさの薄紫アメシストの宝石を拾っている。皐月ちゃんの手を引き私の元へ歩いてくると、じつと私の目を覗き込みながらこう言ったんだ。

「づーほさん、づーほさん。今日ここであつたこと。司令官さんとお姫様のこと。忘れちゃいたいですか？」

とんでもない。忘れちゃいけないことだよ。私たちと深海棲艦は対話し、共存できる可能性があるってこと。これからどうするのがいいか、みんなで考えないといけないんだ。本当はね。

そんな私に、づーほさんにはどうせ見られてただろうから、と件のアメシストを見せてくる。

そのとおり、ばつちり見てました。パクリはいけませんよ。

それにしても美しい。あの姫級が零した涙がそのまま形を持ったような物悲しい美しさだ。

「ええつとお。このアメシストはー、あの二人の遺志なんですよお、石なだけに。なんちやつてー、えへへー。」

だからダメなんだよ、このアル重は。

「だからあ。遺志を継ぐ覚悟のない人には、絶対に、渡せませんー。」

正論だ。

ポーラさんはちゃらんぼらんでアル重でザラさんに叱られてばかりの永世ダメダメチャンピオンだけど、たまーにまともなことを言うから扱いに困る。

でもね、その隠してるつもりのワインはなんなの、つてづほは思うわけですよ。口にはできないけどね。

結局私はポーラさんと一つの賭けをした。

提督がこれをきつかけに人と艦娘と深海棲艦の在り方を考えてみようとするなら、アメシストについてポーラさんから提督へちゃんと報告する。重要な遺留品であるアメシストも提督に渡して分析にかける。それとワインはポーラさんのもの。

なかつたことにしようとするなら、私もポーラさんも遺留品については報告しない。アメシストはポーラさんのもの。それとワインもポーラさんのもの。

分の悪い賭けだなど思ったけど、私はヒトを信じたかつたから乗った。

まあ予想通りの結末だったんだけどね。

あーあ、提督にはちゃんと考えてみてほしかつたなあ。ほんと。

ワイン？

知りません私は何も見てません。ポーラさん怖い。

その数日後。

ポーラさんはザラさんとともに姿を消した。

二人は夜間哨戒に出かけ、そのまま帰ってこなかった。

泊地総出で血眼になって搜索したけれど、見つかったのは
ARDISCO^どAD^なOGNI^事IMPRESA^でと刻まれた砲塔装甲板ひとつ。
ポーラさんの第三砲塔だ。提督はこれをもって二人は哨戒中に深海棲艦と遭遇、交戦し
轟沈したと判断し搜索を打ち切った。でも、みんな言わないけど、私たち艦娘には分
かっていた。あれは私たちに向けたポーラさんの決意表明なのだ。あんなにも大事に
していた第三砲塔を捨ててまで、やるべきことをやり遂げるために出奔したのだと。
だって。

艦娘は轟沈したら身体も艤装も残さず海に還るものなのだから。

呉艦娘寮にて

びっくりと体が震え夜中に目が覚める。

奈落へと墜ちてゆくようなヒヤツとした感覚が体の芯にまだ残っている。また怖い夢を見ていたようだ。ああ、夢でよかった。パジャマが汗でしっとり濡れているのが少し気持ち悪い。

それにしても。

—— シヤシユツ シヤシユツ シヤシユツ

この音はなんだろう。

—— シヤシユツ シヤシユツ シヤシユツ

枕もとの目覚ましを見ると夜中の二時。

—— シヤシユツ シヤシユツ シヤシユツ

聞きなれている音のような気もするけど。

半分寝ぼけたまま頭だけ上げてぼんやりと部屋を見渡す。台所に薄明かりが灯っていて、髪の毛の長い女性の後ろ姿が見える。なんかすごくキラキラしてる。ああそうか、これ、聞いたことあると思ったら間宮さんが包丁を研いでいる音だ。でもなんでこんな丑

三つ時に？なんであんなにキラキラしてるの？しばらくぼうつとその音を聞いていると、包丁が砥石を滑る軽快なリズムに合わせ鼻歌が聞こえてきた。

切れ味抜群 間宮の包丁♪

綺麗なあのコを 華麗にさばく♪

そうよあなたは まな板の上♪

間宮がおいしく いただいちゃうわ♪

なんという肉食系ソング。聞かなかったことにしよう。

そういえば、と先日海防艦の子たちに読み聞かせた昔ばなしを思い出した。お寺の小僧さんが夜中に目が覚めると、隣の部屋で山姥が包丁を研いでいて…、というあれ。三枚のお札っていったっけ。例えるなら間宮さんが山姥、私が小僧さんというところか。間宮さんがあの包丁で私をさばく、つていやいやそんなわけないでしょ。益体もないことを考えていると私の気配に気づいたのか間宮さんが振り向いた。目が合う。うつつらと笑みを浮かべると、すーっ、と音もなくすべるように私に近づいてくる。右手には研ぎたての包丁を握ったままだ。

「あら伊良湖ちゃん起きちゃったのね、残念だわ、うふふっ。」

背筋をぞくつとしたものが走った。え、なに、これ、嘘でしょ。なんで包丁を逆手に持ちかえるの。急転直下の展開に私が硬直している間に、間宮さんは枕もとに立っ

る。

「本当に、残念だったわね伊良湖ちゃん。目を覚まさなければ何も感じずにすぐに楽になれたのに。うふふふっ。」

間宮さんの右手で包丁がギリリと輝く。目が吸い寄せられる。ああ、なんて綺麗な包丁なんだろう。あれは相当の業物だ。私の口から、ひっ、という声とも息ともつかぬ音が小さく洩れる。

私の意識は真つ赤な闇に沈んだ。

「つていう夢を見ちゃったんですよわかります？わかりますよねヤバイ超ヤバイもうこれはもう仕方ないですよねもう必然？つていうかほらあれ、水の低きに就くが如し、なんていいますし」

パンツを履き替えた後の私は実に饒舌であった。間宮さんの前に正座しながら油紙に火の付いたように言い訳を連ねる。一息つくと問題の矮小化による自己防衛も忘れない。なに、どうということはない。びっくりしてパンツがちよびつと、ほんのちよびつと湿っちゃったただけじゃない。断じておねしょとかそういう大層な話じゃないの。

パンツの替えは十分にある。どんと来い（来いとは言っていない）。

それにしても間宮さんとの二人部屋でよかった。秘密の漏洩は最小限にとどめられた。尿の漏洩だって最小限だったんだからね。これが駆逐艦娘みたいな大部屋だった。りした日には噂が噂を呼び、給糧艦ならぬ給尿艦、なんて言われかねない事態だった。それはさておき、まあなんであんな夢を見てしまったのやら。自分の怖がりになる。間宮さんだってほら、苦笑いしながら私を見ているではないか。

「まあ伊良湖ちゃんの怖がりはいまさら仕方がないわよねえ。悪い夢を見ちゃったのよね。大丈夫、誰にも言わないから安心して。」

間宮さん、その優しさが痛いんです。穴があつたら入りたい。

いかに怖い夢だったか、私がおも愚痴つていると、よくわかったわ、と間宮さんが細長い桐の小箱を出してきた。なんだろう。怖がりを治す秘密の漢方だったりして。

蓋を開け中身を手に取った間宮さんを見た瞬間、自分の顔から血の気が引いていくのがわかった。ギラリと輝く美しい刺身包丁だ。夢だったはずの光景がフラッシュバックする。なんでなんで？アレは夢だったんでしよう!?!どうしてこんなことに。

「ねえ伊良湖ちゃん、いい包丁でしょこれ。さつき研ぎ終わつたところなの。それにしても残念だわ。全部忘れていてくれたらよかったのにねえ。んふふっ。」

狂気をはらんだ目でこりと笑いながらそう言うと、間宮さんはゆっくりと包丁を逆

手に持ちかえる。

煌めく銀の閃光に、私の意識の糸はすぱりと断ち切られた。

「マジ反省してください。」

再びパンツを履き替えた私は腰に手を当て仁王立ちしていた。

目の前には小さくなって正座している間宮さんがいる。

「ごめんなさい。だってだって、あんまりくどくどと愚痴るから。これはフリなのかなくなんて。」

「だって政宗もありません。本当に反省してるんですか間宮さんっ。大体そんな尊厳とパンツをかけたフリを私がするわけないじゃないですか!」

伊良湖怒りの説教タイムである。

あんな変則二段オチに私が対処できるわけがない。私の怖がりをナメないでいただきたい。おかげで今度はパンツのみならずパジャマのズボンにまで浸水被害が及んだではないか、ちよつとだけね。ヤバい、超ヤバかった。一回目みたいに布団の上だったらそつちまでいってたかも。

まだまだ新米だけど、これでも私は誇り高き給糧艦伊良湖だ。間宮さんのような超一流の給糧艦になりたいという夢があるのだ。

「大改装を受けて給尿艦にジョブチェンジした伊良湖・改です。提督の特殊性癖にもバツチリ対応するわよ。」

「ってやかましいわっ。マジ下半身パン一で仁王立ちして偉大な先輩に説教する私の身にもなつてほしい。私の怒りが収まらないのを見て、間宮さんはさらに謝罪を重ねてくる。」

「本当にごめんなさい。あれは、その、あれよ。ちよつとしたマーミヤンジョーク？みたいな？パンツは私がちやんと洗っておくからもう許して、ねっ？」

「パンツだけじゃなくてズボンも洗ってくださいいっ、違うっ、自分の下着くらい自分で洗うからいいですっ！まったくもう……。いいですか、こういうのもう二度と絶対にしなくてくださいね、時間もないしお説教はこれで終わり！」

と宣言すると、本当にごめんね、と頭を下げてから間宮さんは朝の支度にとりかかった。

あれ、パンツ。洗ってくれないの。

それはともかくもう外は明るくなってきている。私も仕事の準備しなくちゃ。

はあ、もうなんか毒気を抜かれてしまった。何がマーマイヤンジョークなのか。そんな言葉初めて聞いたよ。どこぞの中華ファミレスか。初めて会った頃はあんなにはっちやけた人じゃなかったはずなんだけどなあ。まあ原因はアレなんだけどね、と一人の学生さんを思い浮かべる。

そう、あの近頃話題の妖精たらしだ。

最近私にも間宮さんの変化の原因がわかった。だって間宮さん、食堂で彼と話してるときとか、ほんの一言二言くらいでもすごい嬉しそうだし、考えてみれば彼が入学してきた頃から急速に明るくなった感じだし、毎週異常に力を入れているカレーだって特製福神漬だつて彼の好みに合わせてるみたいだし、そもそも彼がらみの時以外キラキラしてるの見たことないし。まず間違いないよね。あの業物の刺身包丁だつてこの間の彼との会話がきっかけに違いない。間宮さんのさばきたてお刺身とか。伊良湖はそば耳立てて聞いていたのですよ。

間宮さんは彼のどこに惹かれたんだろう。ちょっと気になる。彼つて妖精たらしなんて言われるだけあつてへんな妖精がたまにへばりついてたりするし、明石さんとか古参の方々とは仲良さそうにしてるのよく見るし、信じていい人なんだろうなあとは思うん

だけど。

「伊良湖ちやーん。そろそろ出るわよ。」

あ、間宮さんが呼んでる。

食堂で偶然、ほんとうにたーまたま彼と顔を合わすことがあつたら、私も話しかけてみようかな。そんなことを考えながら鏡の前で微笑んでみる。よし、笑顔もばっちり。

「はーい、今行きまーす。」

さあ、今日も一日頑張っていこう。給糧艦伊良湖、抜錨ですつ。

いつかどこかの海の上

ニヒヒヒヒヒヒ！タノシカツタ！タノシカツタヨオオオ！

いつかどこかの海の上。天気晴朗にして波穏やか。

そのレ級はひとり歓喜雀躍していた。とても楽しかったのだ。生まれて初めてなくらいの楽しい戦いだっただ。これがはしやがずにいられようか。

生まれてこの方、自分の前ではどいつもこいつもすぐ沈む。すぐ逃げる。そんなのばっか。戦艦だろうが空母だろうが潜水艦だろうが艦娘だろうが深海棲艦だろうが、どうにもこうにも歯ごたえが足りぬ。だがアレは違った。沈まない。しつこく喰らいついてくる。この海にはあんな重巡もいるのか。いやいや、重巡サイコーじゃないっすか。とどめを刺すのがもつたないくらいに楽しめるヤツだった。

一人目は、先制雷撃、速攻轟沈、してやったり。

我ながら 惚れ惚れするよな 手際かな。詠み人知らず。

二人目は…、楽しい！楽しい！

見つけたときはただの昼行燈かと思ったが、どうしてどうしてさにあらず。

凍えるような冷たい眼差し。身に纏うはぞくぞくするほどの殺気。

灼熱の砲撃。

まさかの雷撃。

しまいにやしよぼいが航空攻撃まで。

そうだ、そうだ！モットヤレ！もつとワタシを楽しませろ！

多彩な攻撃手段こそ重巡の真骨頂。オマエは重巡の鑑だ、本当に。

もつとワタシに見せてくれ。もつとワタシを魅せてくれ！

って、アレレ？

砲撃、雷撃、航空攻撃。ワタシも全部できるじゃん。ひよつとしてもしかして、ワタシって実は重巡だった？いやいやそんなことはあろうはずがない。見よ、この大口径砲を、燦然と光り輝く16inch三連装砲を。それドンドンドンと三連撃でもしてやれば、アハハ。吹っ飛んでった。

でも、まだだよねエ。まだこんなもんじゃないよねエ！

しまいにや取っ組み合いのキャットファイトまでしちゃったりして、遂に沈めてやったのがいまさつき。余韻に浸るレ級の右腕は肩口から吹き飛び失われ、立派だった尻尾はいまにも千切れそうで、風もないのにぶーらぶら。

それでも今、海上に立っているのは自分一人だ。

ニヒッ！

左手に握りしめるはひしゃげた連装砲がひとつばかり。アレから窺りつつやったのさ。最後にそれを眺めてひとしきり嗤うと、惜しげもなくぽいと投げ捨て面舵いっぱい。巢へ帰る。

ちよつと長めの入渠も今回ばかりは退屈せずに済みそうだ、と上機嫌のレ級はそのまま水平線の彼方へと消えていった。

戦は終わり、物騒な勝者は去り、静けさを取り戻した海。

そこに薄紫の光が、ちかりちかりとほんの一瞬。

瞬いたとか、瞬かなかったとか。

目撃者などあるはずもなく。真偽も定かではなく。ただただ知っているのは海ばかり。

そんな、
いつかどこかの海の上のおはなし。

田中巨摩という男

田中巨摩たなかこまは大層困っていた。コマなだけに。

というしようもない理由ではなく、目の前でうつむき手で顔を覆いさめざめと涙を流す乙女に本当に困り果てていた。

ほら、はやくしなさいよつ、巨摩さん男の子でしょ！

乙女の隣に座る伊良湖が口パクで俺を非難し、せつついてくる。その間も件の乙女は指の隙間を大きく広げ、チラリチラリと意味ありげな視線を俺に飛ばしてくる。くそう、あからさまに嘘泣きじゃねえか。この場に俺の味方はいないのか。つーか伊良湖よ。お前は呼んでもないのになぜここにいる。

給糧艦全体の問題なんだからあたりまえでしょ馬鹿なの？

俺の心の声に口パクが即座に答えた。何を言っているのかさっぱりわからんが無駄に人の心を読みやがって、この給糧艦 内弁慶丸め。俺以外の人間相手だと大抵キョドってるだけになるくせに。

よそはよそ、うちはうち、つて言うでしよ！は・や・く・つ！

よくわからない理屈をこねながら、むふう、と得意げに俺を見下してくる。そんな伊良湖の鼻がぷっくり膨れるのがどうにもむかつくが、実はそれどころではなく事は緊迫している。この状況を長引かせて万一他の艦娘たちに見つかりでもすれば、また俺の評価が下がってしまう。曰く、いつも間宮さんを泣かせている悪い男、と。

やむなし。いまこそ男を見せる時だろう。

俺は躊躇することなく伝家の宝刀を抜き放った。

「俺が悪かった。だから機嫌直してくれよ、ま……、ま、間宮姉え。」

「……。」

「……………」

「ううっ、しくしく。お姉ちゃん、本当に巨摩ちゃんに嫌われちゃったんだ。もう昔みたいに呼んでくれないんだ……。しくしくしく。」

伝家の宝刀は素晴らしくなまくらだった。

へたれてんじゃないわよ馬鹿……

内弁慶丸からまたも無音の叱責が飛ぶ。畜生。俺はただ、姉に相談に乗ってもらいたいだけなのに、そこまで幼児退行しないとならないというのか。思春期男子のほんの小さな矜持すらもかなぐり捨てねばならぬのか。この面倒くさい乙女の溢れんばかりの

母性に甘えてしまった幼少期の自分を呪いながら、俺は泣く泣く真・伝家の宝刀を振り抜いた。

「相談したいことがあるんだ。ねえ、まーちゃん。頼むよ…。」

ゆつくりと残心を解いたその瞬間。間宮まいちやんの発するキラキラに辺りは満たされ、あまりの眩しさに俺の視界は白一色に染まった。ニヤニヤといやらしく笑っているであろう伊良湖の顔を見ずに済んだことには素直に感謝しようと思う。

思春期男子

田中巨摩にとつて痛恨の茶番劇がひと段落したところで、ニッコニコのキラツキラで間宮が切り出す。

「それで？なにになに？巨摩ちゃんの相談事ならお姉ちゃん、何でも聞いちやうからね。」
 ん？いま何でも聞いちやうって言ったよね？でも、これは悪質なひっかけだ。突っ込めばどうせ俺が何でもさせられちやうことになるのは目に見えている。ここはスルーしてさっさと本題に入るに限る。

「最近思うんだ、俺はこの仕事に向いてないんじゃないかって。まーちゃんから見てもうなんだろう。」

俺は、呉海軍士官学校といういわゆる「提督」を育成する学校で研鑽する学生だ。艦娘とともに深海棲艦と戦う術の色々を学ぶ。提督になれるにせよ、なれないにせよ、課程終了後は何らかの形で海軍に所属するのが前提となる海軍の付属学校だ。提督になりたいという一念を持って、それはもう大変な狭き門を潜り抜け入学を果たした訳だが……。

「まーちゃんも感じてると思うけど、どうにも艦娘の皆さんとの関係がうまくない。なんであんなに避けられちゃうんだろうなあ……。これが適性なしってやつ？」

そんな自分が嫌になつて机に突つ伏してしまふ。

ほんと、なんでなんだろう。毎度毎度演習メンバー6人を集めるのにも四苦八苦するレベルで避けられるというか遠巻きに見られているというか。とにかく彼女らとの間に何とも言い難い絶望的な距離感があるのだ。自分には思い当たる節がなく、状況を改善しようがないのがつらい。

「んー。そんなことないと思うけど。むしろ巨摩ちゃんが私の提督だったら嬉しいくらい。こんなにいい子なのに。なんでなのかしら。お姉ちゃんも伊良湖ちゃんも、明石ちゃんだって、巨摩ちゃんが大好きなんだけどなー。」

そう言いながら、まーちゃんが優しく頭をなでてくれる。男子的には遺憾ではあるがすこぶる癒される。しばらくされるがままになっていると頭をなでる手がひとつ増え

た。ちらりと目線を上げれば伊良湖のやつが俺の頭へと手を伸ばしている。

「な、なんですか。いいじゃないですかっ！たまには私だつて……」

「ありがとなー伊良湖。癒されるわー、悪いがもうちよつとだけ頼む。」

何も言つてないのに逆ギレされたので、ここは言い争うのではなく褒めて伸ばすことにした。伊良湖の鼻がぷっくりと得意げに膨らんだのは見て見ぬふりだ。なんだかんと言つても伊良湖は妹みたいなものだからな。姉二人と妹一人に挟まれて気配りを絶やさないう長男。それが今の俺のポジションつてやつなんだろう。悪くない。

それにしても給糧艦つてすげーよなあ。絶対手からなんか酵素とか出てる。疲労分解酵素的なやつ。給糧艦二人でダブル酵素パワーだわー、パネエわー。と益体もないことを考えながら、しばらく悩みは置いておいて、この心地よさに身を委ねることにした。

いまや私と伊良湖ちゃんの妖精さんたちも総出で、巨摩ちゃんなどで祭りの真つ最中だ。

厨房内のテーブルに突っ伏してすっかり脱力してしまっている巨摩ちゃん。そのあちこちに妖精さんが貼りついているのはなかなかの壮観だ。

「妖精さんにもこんなに愛されてるのにねー。ほんと、どうしてなのかしら。」

私ももちろん妖精さんに負けじと巨摩ちゃんのいがぐり頭をなで続ける。優しく、優しく。んー！いくつになっても可愛いつ！癒されるつ！。この子がおじさんになっても、おじいちゃんになっても、隣でこうしてあげられていたらいいな。おじいちゃんのはははは怖いからまだ考えたくない。

などと他愛もないことを頭に浮かべながら、私はこの子と出会った日のこと、私の運命の日のことを思い返していた。

呉鎮守府へ出頭願いたい。

当時予備役となり一線から離れていた私に、突然招集がかかった。

戦局が悪化しているという話も聞かないし、今更私に何の用があるのだろうか。

出向いてみれば同じく予備役となっていた明石ちゃんも居る。二人で旧交を温めつつ何事かと訝しんでいると、大淀ちゃんとそれに連れられた身なりのいい小さな男の子が現れた。あら、私の知らない大淀ちゃんね、最近生まれた娘かしら。まあいいけど。で、その大淀ちゃんが言うには田中中将による招集だという。田中中将と言えば、どれ

だけ偉くなっても最前線から離れようとしないうの愛人提督のことだろう。やたらと肝の据わった豪快な女性だったと記憶している。何事だろうかと明石ちゃんと顔を見合わせていると、男の子がとことこと歩いてきて胸に大事そうに抱えていた封書突き出した。そのまま私をじっと見つめると、これ読んで、と言う。

大淀ちゃんの方を窺うとにこりと笑顔を見せたので、まずは開封。早速明石ちゃんと読んでみることにした。

親愛なる間宮、親愛なる明石へ

この手紙を持たせた子の名は巨摩。田中巨摩だ。

戦災孤児であり、私が養子として引き取ることにした子である。

だが、知つての通り私は提督として前線から容易には離れられない身。わが泊地が子育てに適した環境ではないことは君たちもよく分かっていると思う。加えてこの子はどうもこの艦娘たちとはそりが合わないようだ。

単刀直入に言おう。

上記事由から、現在予備役である兩名にこの子の養育を命じたい。

本土の我が家を使つてもらつて構わない。そこに三人、住み込みで頼む。必要な養育費は毎月振り込むようにする。それ以外に必要な費用があれば随時私に相談してほし

い。

この子はこの歳まで学校へ通ったことがなく、常識も少しおぼつかないところがあ
る。だが性根は決して悪くない。二人でこの子の心技体を鍛え上げ、一人前の立派な男
子に育て上げてやってほしい。これは至らない義母からの切なる願いでもある。

では、くれぐれもよろしく頼む。

海軍中將 田中佳代

追伸

このこと。呉の鹿島の奴には決して知られてはいけない。わかるな。

「んー……と……。どうします？ 追伸は置いておくとして。」

「そうねえ……どうしようかしら。追伸は置いておくとして。」

単刀直入なのはいいが、いくらなんでも情報が少なすぎるだろう。

あなたに拾われる前はどこで何をしていたのか、とか、歳は、とか、どんなタイプのお姉さんが好みか、とかこの子に関する情報が全く足りていない。

そう思いながらこの子に目をやれば、相変わらずじつと私たちを見つめ続けている。こちらが思案している間もずっとそうしてたのかしら。艦娘とそりが合わなかったと

というのが具体的にどういうことなのかは分からない。でも、私と明石ちゃんの妖精さんたちが揃って出てきて興味津々という風にこの子を見ているあたり、少なくとも私たちが二人に関してはその心配しなくてもいいみたいだ。ふーむ。

なかなかはつきりしない私たちに待ちくたびれたのか、

「読んだ？」

そう短く問いかけてくる。うんうんと頷くと、私と明石ちゃんの手をきゅつと握ってきた。やわつくくてあつたかくて小さな手。あの手に初めて触れたときの感触は、いまでも忘れられない。

「間宮お姉さん……、まーちゃん？ 明石お姉さん……、あーちゃん。まーちゃん、あーちゃん、これからよろしくお願いします。」

その瞬間、私たち二人の妖精さんが、わつと飛び出し巨摩ちゃんに群がると小躍りを始めた。歓喜の踊り？

一方私はと言えば電撃に打たれたような突然の激しい直感に身を震わせていた。
ウ、ウォーター……。ウォーター！ウォーターアアア!!!

そうよ！今の私はウォーターという言葉を初めて見つけた時のヘレン・ケラーだわ！雷光のようなひらめき。ずっと足りなかった何か、足りないことに気づいてすらいなかった何かに十全に満たされる感覚。そうだ、私はこの子に逢うために艦娘になったの

だ！そんな不思議な確信の炎が私の胸に灯っている。自分の全身からまばゆいばかりのキラキラが放たれているのがわかる。興奮冷めやらぬまま、はっ、と気づいて明石ちゃんを見れば、

「ウ、ウオーター……ウオーター……」

放心しながらそう呟いている。目が虚ろだ。これは……。ぶっちゃけちよつと怖い。

巨摩ちゃんが突然のWウオーター連呼にドン引きしている。私たちから離れようと必死で手を引っ張るのも無理はない。だが今や逆に私たちが握った手を離さない。ここでこの手を離してしまったらこの子との関係はもう終わりだ。そう私の女の勘が告げているのだ。

不気味さとはにかくとして、明石ちゃんも私と似たような境地に至っているということがわかった。ウオーターだし、全身からキラキラ放出中だし。これなら問題なし。逃がさぬよう壊さぬようにと私はこの子を素早く優しく抱きしめる。そして耳元でこう囁いたのだ。

「はい。間宮お姉ちゃんですよー。大丈夫だからねー。これからずっと、よろしくね。巨摩ちゃん。」

そう語りかけながら背中を優しくぽんぽんしてあげる。

しばらく硬直していた胸の中のぬくもりが、そうするうちにすつと力を抜き身を預け

てきてくれるのを感じた時、私の歓喜は静かに爆発した。

ちよつと間宮さんそれずるくないですかあ！、なんて正気に戻った明石ちゃんが飛びついてくるのも気にならないくらいに。

この時世界は、二人分のキラキラでそれはもう眩いばかりに輝いていたのだ。

「……ちゃん？まーちゃん？まーちゃんってば！もういいから。これ以上高速で頭撫でられたら、俺ハゲちやうから！」

幸せな回想をしているうちにテンションが上がってしまったようだ。

「あらあら。ごめんね巨摩ちゃん。でも大丈夫。お姉ちゃんはハゲた巨摩ちゃんでも大好きだから。」

そういうことじゃないんだけど、と言いながら巨摩ちゃんがこちらを見てくる。相談事の続きをしたいのだろう。

「んー。お姉ちゃんは巨摩ちゃんの提督になりたいって夢、諦めてほしくないなあと思っただけだ。そうだ、お姉ちゃんからみんなに聞いてみよつか？なんで私の巨摩ちゃんと仲良くしてくれないのって。」

「だめだめ。自分の影響力考えてよ。」

半ば空気と化していた伊良湖ちゃんがコクコクとうなずく。

まあ確かに内心想うところがあっても、みんな話を聞いてくれそう。こんなことなら艦連の名誉会長なんて引き受けるんじゃないかなかったかも。

「じゃあじゃあ、お姉ちゃんが演習メンバーに入ろっか？こう見えてもお姉ちゃん、なかなかやるんだゾ。」

「いやいや。それも演習にならないから。相手チームが白旗上げて終わりだから。たとえ演習でも給糧艦に手を上げる艦娘なんていないよ。」

伊良湖ちゃんが玄人張りの激しいヘッドバンを見せる。そんなことになったら絶対自分も巻き込まれるとわかっているのだろう。

むう。それならお姉ちゃんに出来ること、なんにもないじゃない。

「いいんだ。まーちゃんが応援してくれるっていうならそれだけで。俺、もうちよつと頑張ってみるよ。それに、まーちゃんの提督になるって約束したしな。こんなところで諦める場合じゃないって改めてわかったんだ。」

まーちゃんの提督になる、まーちゃんの提督になる、まーちゃんの提督になる…。

なんとという幸せのリフレイン。あの約束、覚えててくれたんだ。もう最っ高。みなぎってきた。いまなら大和ちゃんだってワンパンKOできそう。感極まった私は

ちよつと物騒なことを考えながら思いつきり巨摩ちゃんを抱きしめ、いがぐり頭に頬をすりすりしたのだった。

抱きしめたのには嬉し恥ずかし涙を隠したかったという理由もあったのだけれど、とりあえず今はそれはいいんじゃないかしら。

田中巨摩という男 密談

時はふたたびン年前へと遡り。

間宮明石に巨摩の三人、さだめのであいのそのあとに。

その晩のこと。

大淀は遠距離通信を用いて、密かに田中中将と連絡を取っていた。

中将の予想通り顔合わせはうまくいったようです。

ご苦労だった。問題なし、と見てよいか。

はい。しかし想定外のこともありました。

ほう。続ける。

その。間宮さんと明石さんが…。

なんだ。臆さず言つてよい。

若返つていました。私の見立てではありませんが。

は？

若返つていました。私の見立てではありませんが。

聞こえている。二度言う必要はない。

失礼いたしました。

若返るも何も、君らは歳をとらんだろう。要領を得ないな。

肉体の不老と艤装の劣化は別、であります。

では、経年劣化していた艤装が蘇つたと？

おそらく。

なんなんだそれは。くわしく。

お・そ・ら・く、ですけどねエエエ（#。∩。ムキー!!!

くやしく、ではない。くわしくだ。

失礼いたしました。中将、滑舌悪いですね。

大淀貴様…、まあ、いい。続ける。

件の三人が、というか巨摩君が二人との同居に同意した時です。

ふむ。同意した時、とは具体的には？

三人がひつしと抱き合い、巨摩君が二人に身も心も委ねた時です。なんとといううらやま…

はい？

なんでもない。続ける。

その時お二人から高揚時のキラキラが大量に発せられまして。

ふむふむ、それで。

その際に艀装が顕現していたのですが。

なるほど、高揚の際によくあることだな。

すでに蘇った状態でした。クレーンとか、デリックとか色々。

ふーむ。お前はどうか感じた？

黒光りして太くて固くて…。あれに組み敷かれたら私はっ！あふんっ！

…で？ お前は、二人を、どうか感じた？

んんっ…、取り乱しました。武装云々ではない猛者の雰囲気。

だろう、な。

非戦闘艦と侮っていました。全盛期のお二人があれ程とは。

ふん、そうか。全盛期か。奴らはくぐった修羅場が違うからな。

はい。

その違いを感じ取れるだけお前はましだ。自分を誇れ。

ありがとうございます。

この件は極秘だ。いずれは露見しようが、それまでは口外無用。

承知しました、中将。

うむ…。

…？

…。おほん。

中将？

話は変わるが、な。巨摩を本土へ送って以来、な。

はい。

うちの間宮と明石がすっかりへそを曲げてしまつて、な。

はあ。

口をきいてくれないんだ。アイスも作つてくれない。

ふーん。

工廠妖精の士気もダダ下がりだ。あと、アイスな。

へえ。

二人だけはあの子をいたく気に入っていたようで、なるへそ。

どうしたらいいかな。間宮アイス、私だって食いたいんだ。

。。。

アイス。食いたいだろ？アイス。さあどうする？

死ねばいいんじゃないですか。

なんだと？

死ねばいいんじゃないですか。

貴様ツ！ に、二度も言うことないじゃないか！

二度も言わせないでください。

クツ。。。な、何かよいご機嫌取りはないだろうか？なあ？

ザー、ザザツ

おい。大淀？

ザー。。。

おい。おいつ！ 大淀？ 切るな！ 大淀オオオオ！

留鳥

「なあ、電。いたな。今日も。」

「いたのです。のんびりと釣りなんてして、今日もなんだか楽しそうだったのですよ。」

ここは南方の名もなき泊地。

昼下がりの少し遅い頃という微妙な時間帯であることもあり、談話室には気怠く落ち着いた空気が流れている。資源収集の遠征から無事戻り一息ついている天龍と電の会話を、ゆつたりと回る古風なシーリングファンが程よくかき混ぜてゆく。使い込まれた黒光りした籐の椅子にややだらしなく座る二人が小声でぼつりぼつりとよもやま話をしている、何がいたんだって？と語りかけながら提督がやってきた。両手には冷たそうに汗をかいたグラスをひとつずつ持っている。遠征帰りの二人を労おうということだろう。

提督が現れたことでやや姿勢を正した電が問いかけに答える。

「遠征中に珍しい鳥さんを見かけたのです。とつても綺麗だったのです。」

「ああ、そういうことだ。ありやあ渡り鳥かなんかかねえ。ま、外海に出れねえ提督には無縁な話だがな。へへっ。」

そう言いながら隻眼を睨りウインクしてみせる天龍の頭を、コノヤロ、と軽く小突きながら提督が座ると、そこからとりとめもない雑談が始まる。どうやらこの泊地では、提督と艦娘の関係は良好であるようだ。三人の笑い声が響き、静かだった談話室にわかに活気が宿りはじめる。仲良きことは美しきことかな。

グラスの中で溶けて小さくなった氷が、からん、と人知れず小さな音を立てた。

彼女らが見たという渡り鳥の話はそれきり蒸し返されることはなく、気怠い午後の優しい風と共にどこかへと流されていった。

ふえつつぶしっ！うあー。

まったくもって乙女力に欠ける乙女のくしやみがひとつ。

「どこかで誰かがポーラの噂をしますねえ…へっぶしー！ああー。」

おまけにもうひとつ。

すると隣で釣り糸を垂れていた男の子が、竿を置きポーラの袖を両手で掴むと心配そうに言う。

「ポーちゃん病気になった。帰ろうポーちゃん帰ろう。」

「病気じゃなくつてえー。いいですかあ。くしゃみは、一誹り二笑い三惚れ四風邪、と言つてですなえ。つまりい、ポーラはあ…、笑われてるっ!？」

「だめ。ポーちゃん帰るの。帰つて寝るの。病気なおすの。わかつた？」

かけらも嘘を含まないちいさな二つの瞳にじつと見つめられること5秒、ポーラは敗北を悟った。もちろん軽いボケをスルーされてしまったことにはない。いうなれば、こりやあもう梃子でも動かないな、という諦めだ。一緒に暮らしてわかつてきたのだが、この子がこういう目をしたときはもう何があつても曲がらない。ただの我が儘や甘えなら一蹴もできようが、そういう時は絶対こんな目をしないのが困つたところだ。この頑固坊主め。

「はあ……。ちよつと過保護じゃないですかねーとポーラは思いますが。わかりましたよー。それじゃあ本日の食糧調達作戦かんりよー、ポーランドに向けてえ、ばつびよー♪」

「かんりよー。ばつびよー。」

ポーラは満足そうな顔をした男の子の乗った粗末な丸木舟をゆつくりと曳き始める。

彼の言うところの「病人」であるポーラに舟を曳航させるのはいいのか？それで本当にいいのか？お前の優しさはその程度か？と、心の中でたくさんの突っ込みを入れながら。

Ci v e d i a m o !

去り際に二人は振り返り、誰もいない海に一言告げると小さく手を振ってから、今度こそゆつくりと住処へと帰っていく。

ちやぶん

海面にほんの小さな水しぶきがひとつ、あいさつ代わりにのように跳ねた。

「しっかしよー、あいつら何なんだろうな。野良の艦娘一人に子供が一人。どういう組み合わせだよ。訳が分からねえ。」

「そうね、不思議よねえ。でも、ああいうのんびりした暮らしにもちよつと憧れるかも。天龍ちゃん、そのうち一緒にどう？」

「ぎけんなつっの。俺は戦いのないところへは行かねー。」

「暁たちも置いていかないでよね。行くときはみんな一緒なんだからっ！」

「行かねーよ。つたく。」

場所は変わって、ここは先ほどの天龍が率いる水雷戦隊の相部屋である。住人は、天龍龍田に六駆の四人。計六人が共同生活している大部屋だ。

就寝前の自由時間、どうやら昼間に見かけた「珍しい鳥さん」の話で盛り上がっているようだ。

話題の艦娘と子供の組み合わせは馴染みの遠征ルートでちよくちよく見かけるコンビらしく、六人全員がすっかり顔を覚えてしまっている。

にもかかわらず、だ。

「アイツ、何モンだ？あんな艦娘見たことねーんだよなあ。お前ら、知ってるか？」

「確かに見たことのない人ですが…、野良のみなさんの事情には踏み込まないのがマナー、なのでですよ。」

「電の言う通りよ。天龍さん、あんまり詮索しちゃダメよ！」

この通り、あの艦娘の名前や艦種を誰も知らない。

「だけどよお、気になるじゃねえか。なーんかバタクさい顔つきしてるしよ、ありやあ、

ひよつとして海外の艦なのか？海外艦って本当に実在すんのか？ そうだ、響。お前、なんか知らねーか？」

「…。私は暁型二番艦、響だよ。私は、日本の艦だ。そんなの知らないね。」

「ちよつと天龍さん！暁の大事な妹をいじめないでよね。いくら天龍さんでも許さないんだからっ！」

「あー、いや。すまねえ、響。そんなつもりじゃなかったんだ。ただ、艦歴の長いお前ならひよつとしてと思つて。それだけだ、他意はねえ。ホント、すまなかつた。謝る。」

「いいよ。天龍が粗忽者だつて、私たちはよく知つてるからね。それにね。あの人は本当に知らない顔なんだ。私には彼女の出身も艦種もわからないよ。」

「粗忽者かよ…。ぐうの音も出ねえ。」

このちよつとメンドクサイ感じの響。とうに改二改装をすませてヴェールヌイという名前も持つており、つまり今のところ艦娘で唯一の海外艦的な何かという位置づけなのだが、本人は頑としてそれを受け付けない。私は響だ日本の艦だと何度でも言い張るのである。おまけに他のヴェールヌイと違いロシア語を決して使わない。素直にヴェールヌイと名乗る響もいれば、こんな頑なな響もいる。個性ということ許してあげてほしい。

「でも、もし。もしあの人が生まれただで、本当に初めての海外艦娘で、仲間がいなくて、

それでどうしたらいいか分からなくて野良なんだつたら…。電は助けたいのです。」

「そうね！その時はもちろん雷も助けるわっ！」

「私たちの方針としては、あの人のほうから助けを求めてくるようなことがあれば動く、でいいんじゃないかな。」

「ああ、響のいう通りでいいだろう。まあ結局のところ、だ。アイツらの幸せと俺たちの幸せは同じとは限らねえ、つてこつた。」

この言葉を受け、発言者の天龍を除く5人はしばし絶句した。

まったくもって天龍らしくない思慮深さ。どうした天龍？熱でもあるのか？

しばらくの静寂の後、自分を心配するような各人の表情から五人一様のその思いを読み取ってしまった天龍。いじけてふて寝した、そうだ。

「どうせ俺は粗忽者だよ…。くすん。」

頑張れ天龍！負けるな天龍！この艦隊の旗艦はお前しかない！

でも。なんで子供が一緒にいるんだらう…

この疑問は、あまりに当たり前すぎて、そして答えが絶対出ないことがわかりきっているためについぞ話題に上ることはなかったのだった。

ここはポーランド。

愛しの我が家、常夏の島。

バナナいっぱい、夢いっぱい。

燃料弾薬ボーキもいっぱい夢の島♪

お酒がないのが玉に瑕：

B^ポo^ンn G^{ジョ}i^ルo^ノr^ノv! ザラ級重巡三番艦、ポーラでくす。

男の子と二人で無人島サバイバルに挑戦中でくす。頑張りまくす。

で、この島。ポーラが住むからポーランド。

ポーラが命名しました。我ながらいい名前。シヨパンでポロネーズでマズルかなあそこじやないですよ。ここがどこだかはよく知りませんが、バルト海とかきつと遠すぎです。わかります。強制断酒中のポーラにはとてもたどり着けそうにありません。はあ。

ポーラ、気が付いたらこの島に流れ着いてました。明るい月夜、白い砂浜の上、身一つで。隣には気を失った男の子が一人、転がってました。今考えても不思議ですなあ。

あの時確かに沈んだと思っただけです。

ザラ姉さまは見当たらず、いたのはポーラとこの子だけ。

艦装を展開してみれば第三砲塔はしつかりとなくなつたままだし、あのバグってるみたいに強い深海棲艦との遭遇戦は夢じやなかつた、はず。なにより、ポーラのリボンタイブローチには、このアメシストが今もしつかりと収まっています。

夢じやない。

そうそう。この子の名前もポーラが付けました。困つた子だから、コマ。

えへへ、いい名前でしょう。ポーラ、会心の命名ですよ。

最初は何も喋らないし、でも引つ付けてきて離れないし。ホントに困つた子で、ここまで育てるのは、大変だったんですよ。ポーラに育児の才能があるとは思わなかつたでしょ？ 苦労した甲斐あつて、とつてもいい子に育ちました。ポーラ、コマじやなかつたらここまで頑張れなかつたなあ。えへへ。ザラ姉さま、ポーラだつてやればできるんです。

「ポーちゃんひとりでニヤニヤ、キモい。病気？ 早く寝る。」

夜。寝る前の安穩としたひととき。粗末な寝台に寝つ転がりながらひとりで昔のことを回想したら、コマのご機嫌損ねちゃいました。構つてあげないとすぐ拗ねるコマ、楽しい。

「はいはい。じゃあ、キモくて病気のポーラはあ、コマにうつすといけないから離れて寝なきやいけませんねー。Arrive^はderci^はです、コマ。」

そう返しながら、すぐ隣に転がるコマからじわりと距離をとるように離れる仕草を見せれば、案の定。

「だめ…」

もう離れないとばかりにしがみついてくる。んふふ、このひつつき虫め。愛い奴、愛い奴。こういう野良艦娘^{のんびり子育て}暮らし、やってみれば割といいもんですねえ。あとはお酒があればなあ…。

ねえザラ姉さま。もう心配しないで。

大丈夫。ポーラはここで、ちやーんと頑張つてますよ。

ふーん。珍しい鳥さん、ねえ…。

言い得て妙なり。なるほど上手いこと喻えたものだよ。

未発見海外艦の可能性ね。これ、なんとかこっちの鳥籠の中に引き込めんもんかねえ。しかし、うかつに野良艦娘に手を出せば怖く、艦連様にお叱りを受けてしまうからな。ふーむ、どうするか。

深夜の執務室で端末の画面とにらめっこしながら唸る人物が一人。この泊地の提督その人である。

見ているのはとあるシステム画面。

泊地内の各所に仕込んであるマイクで艦娘の会話を24時間音声モニタリングしたものを音声認識させ、テキスト出力する、というここの提督オリジナルのシステムだ。プライベートだったりセンシティブだったりする情報はAIで自動的にオミットする、という凝った仕様になっている。

公式の報告としては上がってこない些細な情報を拾い上げることで泊地運営に役立てることができ、ちゃんと艦娘のプライベートにも一定の配慮をしている。

という大義名分で理論武装し秘密裏に運用しているが、「配慮」の閾値を提督が自在に調整可能という仕様の時点で完全にまっくらくろの黒である。更にマイクやシステムの存在を艦娘たちに公開せずそこそとやっているあたり、ただの盗聴だという自覚は提督にもあるのだろう。このシステムの存在が白日の下に晒されれば確実にお叱りどころでは済まないが、それでも彼女にやめる気は毛頭ない。たまにこういう美味しい情

報が手に入るからだ。

人間の子供と一緒に、というところをうまく使えば…、いやいやそれは艦娘の逆鱗に触れることになるかもしれないな、等々。様々な可能性を探りながら、さてどう事を運ぼうかと思案を続ける提督の長い夜は更けていくのだった。

ふえつつぷしっ！うあー。

やつぱりポーちゃん病気。

違いますう。きっと誰かがポーラの噂をしてるんですよお。

うーん…誰？

招魂（前）

彼の手には便箋が一枚。

洒落た薔薇の透かしが入ったいわゆる透かし和紙で作られている、細かい意匠の凝らされたなかなかの逸品である。そこにはほんの一行、端正な字でこう書いてあった。

まきますか

まきませんか

うーん。これはいったいどうしたものだろう。

しばし黙考の末、隣から便箋を覗き込む二人の姉へと目を遣る。二人ともちよつとぶるぶるしている。それぞれ彼の左右の肩に手をかけ、踵を目いっぱいあげて頑張る姉達の姿にちよつとした和みを感じながら、ああごめん、と彼女達が見やすいように便箋を持つ手を下げると、ホント図体ばかりでつくなつちやつて、とため息をつきながら見上げる明石姉と目が合った。

「明石姉、これなに？　世界線違くない？」

「世界線？　知らないわよこんなの今まで見たことないし。あーもうやっぱり巨摩の初建造は他の子達と別にして正解だった。巨摩ならなーんかやらかすんじゃないかと思つてたのよねえ、やつぱりそうだったじゃない私の思つた通り。もうなんなのこれ、どういうことよどうしてくれようかしらっ。」

すごい早口。あふれんばかりの好奇心に瞳を輝かせながら、嬉しそうに両手をわきわきさせている我が姉。そう、これはマッドサイエンティストモード。好きにやらせるとろくなことにならないパターンだ。そう悟つた巨摩は、今も視界の隅でおいでおいでと蠢いている小さな白い手を無視しながら、早々に片を付けるべく胸ポケットから愛用の万年筆を手に取つた。

艦娘建造実習。

ことの発端はこれである。

読んで字のごとし。建造の実習であり、海軍士官学校での今後のパートナーとなる艦娘を決める、学生たちにとっての一大イベントでもある。通常なら学生たちを一人ずつ

工廠へ呼び、最低量の資材で次から次へと建造させていくだけの簡単なお仕事なのだが、ここで工作艦明石は不吉な予感に震えた。ほかの子たちはともかくとして、ウチの巨摩はなーんかヤバいのではないかと。別に彼の性格や行動に問題があるわけではない、間宮と二人で慈しみ育ててきた自慢の息子というか弟というか、近すぎてなんと表現したらよいのかもわからないような関係だが、とにかくいい子に育ってくれた。しかし何かそういうのとは違うところで嫌な予感がする。

例えば、艦娘や妖精達との関係に妙に偏りがあるところとか。

例えば、いつもひつついているあのよくわからない妖精っぽいヤツとか。

巨摩は一部の艦娘からは、妖精たらし、なんて呼ばれているらしい。だいたいいつも妖精が何人か引っ付いているのを珍しがった艦娘による命名だが、これが言いえて妙。巨摩が近くにいると艦娘付きのはずの妖精が何人か、吸い寄せられるように彼に貼り付いてしまうのだ。しかもあつちにいっちゃった妖精達は猫がマタタビに酔うが如く益体なしになる始末。大抵が缶とか要員系とか電探とか地味に大事なところの妖精なのも質が悪い。私みたいな後方支援系の艦娘にとっては、まあウチの子たちと仲良くしてくれてうれしいわ、くらいのもものだろうが、最前線で殴り合いをする娘たちからしてみればたまったもんじゃないだろう。

あの子はきつと妖精をダメにするクッションかなにかなのだ、と私は思う。

巨摩が毎度毎度演習の面子集めに苦勞する原因はこれだな、と私は確信しているのだが、あの子つたら、間宮さんには相談しても私には全然頼ってくれなくてなんか癪だから、本人には教えていない。巨摩、というかヒトには妖精は見えもしなければ対話できるわけでもないの、知ったからといってどうこうできるものでもない。よつて、ちゃんと明石お姉ちゃんにも甘えて頼ってくるまではこのままでもいいだろう、ザマーミ口、とか思っていたりする。

もう一つの懸念が、いつも巨摩の頭の上でぐでつているあの妖精っぽいヤツだ。

職業柄大抵の種類の妖精は覚えている明石だが、アレだけは巨摩の頭の上以外では見たことがない。妖精というのはいたずら好きで気まぐれでよくわからない生き物だが、それぞれが確固たる役割を持つて存在しており、その本分を果たすことにおいてはさぼったり手を抜いたりすることはない、普通は。だが、アレはなんだ。いつもぼやーつとしてゐるばかりで働いているのを見たことがない。いじつてやろうと明石が手を伸ばしてもひよいと避けたりすつと消えてしまつたりと触らせてももらえない。艦娘から逃げる妖精とはどういうことなのか。

ああ、一度だけアレが役に立ったことがあった。

巨摩がまだ小さかった頃、間宮さんと三人で山登りに行った時のことだ。ちよつと目を離したすきに巨摩が足を滑らせ崖から落ちそうになつたことがあった。その時、アレ

は巨摩を蹴飛ばして崖から遠ざけると、代わりに自分が崖の下へ転げ落ちていった。駆付け付けた私にきゅつと縋り付き、あーちゃんあーちゃんと泣く巨摩はそれはもう狂おしいほどに愛しく、もう絶対に離さないと思ったものだ。崖下に落ちていったはずのアレはその時にはもうしれつと巨摩の頭の上に戻っており、非難囂々の厳しい視線を私に浴びせていたのを覚えている。その時はこいつは巨摩を守るために存在しているのかもしれないと考えもしたが、アレはそれ以降何をするともなくただ漫然と巨摩の頭の上で日々を過ごし、そして、私に何らかの意思をぶつけてくることはなかった。

だが、そろそろアレがなにか斜め上のことをやらかすんじゃないか、そんな予感がするのだ。

そんなわけで、工廠を使った実習関連の采配は工作艦にすべて任されているのを幸いに、巨摩の順番を最終日の一番最後に設定し、念には念を入れてと間宮さんにも声をかけておいたのである。

「ねえ明石ちゃん。私にすごくいい考えがあるんだけど聞いてくれる？」
何かをひらめいたようないい顔をして間宮さんが話しかけてくる。

巨摩以外の学生は皆つつがなく初建造を終え、ほっと一息ついているときのことだ。まあろくでもないことだろうとは思いつつも、なんでしよう、と先を促してみる。

「あのね。まず、こっそり私と明石ちゃんが建造ドックの中に入っておきます。次に、何も知らない巨摩ちゃんが建造ボタンを押します。そうするとあら不思議……」

「はい却下」

「なんでよお……。私たちがパートナーだったら巨摩ちゃんだつてきつと喜ぶと思うんだけど。」

ぶつちやけそれは私も考えはしたが、さすがにまずかろう。とりあえず今のところは教官と厨房責任者という立場で毎日顔を合わせることができる範囲で満足しておかなければならない。巨摩が無事にここを卒業して提督として独り立ちできたら、その時こそは……。

はいはい、そろそろ巨摩が来ますよ、と軽く流すと、タイミングよく工場事務室のドアをノックする音が聞こえてきた。来たか。

さあ、巨摩の初建造に取り掛かろうか。

間宮さんが空いている椅子をクレーンで粉碎して、巨摩を自分の膝の上に座らせようとしたり、

(妖精達に椅子を急造してもらった)

間宮さんがどこからともなくお茶と羊羹を出してきて、まったり家族団らんしようとしたり、

(がぶ飲みドカ食いして3分で終わらせたった)

間宮さんが、やっぱり私たちがパートナー艦になれば…と駄々をこねだしたり、

(巨摩からきっちり説教してもらった、GJ巨摩)

と色々あつたが、ともかくあとは巨摩が建造ボタンを押すだけというところまできた。

いつも通り巨摩の頭の上でやる気なさそうにしているアレにずっと注意を払ってきたが、ここまでのところ特別の動きはない。どうやら私の杞憂だった、ということでも済みそうだ。

「それにしても建造ドツクって、どうしてこんな西洋の棺桶みたいな形なのかな。これじゃあドラキキュラとかゾンビとか出てきそうだよな。」

巨摩が縁起でもないことを言い出す。縦長の六角形、ちようど人が一人横たわつて入れるくらいのおおきさで、繊細な装飾が施されている漆黒の棺。芸術的な価値さえ感じるたはずまいだ。まあ確かに棺桶としか言いようがない見た目だが、作っているのが妖精なだけにどうしてこうなつてるかとか、この見た目にする必要があつたのかとか詳しい

ところは私も知らなかったりする。どこの工場に行ってもこのスタイルで統一されているから、妖精達にとっては建造ドックとはそういうものなのだろう。

「ほら、四の五の言わないでさっさとボタンを押すっ！」

ぺちん、と軽く尻を叩き急かしてやると、へいへい、と呑気に答える巨摩がようやく手元の建造ボタンを押し込んだ。アレは相変わらず巨摩の頭の上でたればんだ、なにも動きを見せない。よしよし順調だ。

ごうんごうん…カタカタカタカタ、チンツ！

「おお！明石姉え、残り時間10秒だつて。早いなあ！」

「はあああああああああ!?」

建造がたったの10秒で終わる？

そんなのあり得ない！

普通じゃないっ!!

時間もないっ!!!

ないない尽くしじゃないか畜生っ！

アレが何もしていないことを素早く確認、間宮さんとアイコンタクトを取り巨摩を背

中に庇う位置へと躍り出た。愛用のロングレンチを両手に構え不測の事態に備える。隣には間宮さん、こちらでも愛用の牛刀とおなべのふたで武装し、普段は見せることのない濃い殺気を身に纏わせている。

何が起きても、巨摩だけは絶対に守る。

残り8秒。

「えっ・ええっ・ちよ……」巨摩はそこでそのままカウントダウンッ！

急展開に戸惑う巨摩に、振り向かず「仕事」を言いつける。

あの子ならこれで状況を察するだろう。

残り5秒。

5！

巨摩が言われたとおりにカウントダウンを始める。

よし。やや声が硬いが大丈夫だろう。

4！

さつと振り向き、たまには仕事しろよ妖精、という強い意思を込めて巨摩の頭上に一瞥をくらわす。アレが妖精ならば言いたいことは伝わるはずだ。

3！

珍しく互いの視線が絡み合うと、アレは、ほにやり、とふやけた笑顔を一瞬だけ見せサムズアップした。とりあえず今回は敵にはならなそうだと判断し前を向く。

2！

もう一度、間宮さんとアイコンタクト。

互いの硬さに気づき苦笑。一度体の力を抜いてから、再び前を向き構えなおす。今のところドックに異常は見られない。

1！

間宮さんとのコンビは久しぶりだな。

給糧艦だろうと工作艦だろうと、武器を持ち戦うことを余儀なくされた昔のことを思い出す。

さあ、鬼が出るか蛇が出るか。それとも単なる建造失敗で終わってくれるか。

0！

……。

すこっ！ぷしゅうううう…。

ドック基底部のダクトから高圧蒸気が排出される。ここまでは通常シーケンスの通りだ。

普通ならこれからドックの蓋が開き、艦娘が顔を見せることに……

コンコンコン、コンツ。ガタガタツ！

「ちよつとおお、なあにかしらあ、これえ？」

ドックから音と声がする。

間延びしたしゃべり方、女性のようだ。

普通の建造結果ではなさそうだけど、危険、というのはどうも違うような雰囲気。

ガタツ…、ガタガタガタツ！ドンツ！

「ちよつとお？ ちつとも、開かないじゃ、ないのよつ！」

ガタツ…、ガコツ…、ドンツ！

「誰かあ、いたら返事をなさあい。誰もいないのかしらあ？」

ドックから出られなくてもがいているらしい。

どうしたものかと間宮さん、巨摩と目を合わす。

出られなくて困ってるんじゃないかな？、と巨摩。それはそうなんだろうけど、建造

ドックから出てこれられない艦娘って…いやいやないでしょう、普通に考えて。

間宮さんはすっかり殺気が抜け落ちて、頬に手を当てて、あらあら、と困り顔。

アレは巨摩の頭上でクツクツと腹を抱えて笑いながら転げまわっている。よく頭の上から落つこちないものだと思う。

コンコン…、コンコンコンゴンガンッ！

「ちよつとお、これをつ、開けてつ、欲しいのつ、だけれどつ！」

ガタガコガタガタツ！ドンツ！ドンツ！ガタツ！ドンドンドンドンドンッ！

中の人（？）はドックの蓋がちつとも開かないことにかなりいらだってきたようで。

見ていられなくなったらしく、巨摩が救済に出た。

「あのー、それさあ、棺桶じゃないから。建造ドックだから。横にずらして開けるんじゃない、こう蝶番でカパツと上に…」

「おどりや！ クソがあああ！」

バキャンツ！

「「「あ」」」

救済は間に合わなかった。

ドックの蓋に力任せに風穴が開けられ、そこからグーの手が、にゅつ、と生えている。小さな、白い手だ。

あー、へー。そうなんだー。

ドックの蓋って素手でぶち破れるものなのねー。明石、随分長いことこのお仕事してるけど、知らなかったなー。ふーん…。

随分短気な人だなあ。と巨摩。

そうねえ、ちっちゃくてかわい手。お人形さんみたい。と間宮さん。

いやいや、そこなの？感想は？そうじゃないでしょう。この工廠で唯一の建造ドックに風穴開けられちゃったんですけど。工作艦困っちゃうんですけど、これ。

困惑しているうちに、すーつ、つと手が引つ込むと、しばらくして今度はなにやら封

筒をつまんだ手が出てきた。

「そこにいるんでしょお。さ、選ばせてあげるわあ。せいぜい悩みなさあい。」

とりあえず話を先に進めたいらしく、すべては計画通りと言わんばかりのすました声とともに封筒がひらひらと振られる。

中の手紙を読んで、何か選択しろ、ということだろうか。なんか一周回って面白くなってきた。明らかに艦娘ではない未知の生物が中にいる。ソイツは一方的にこちらに選択を迫っている。これは…第三種接近遭遇なのね！そうに違いないっ！UMAとの第三種接近遭遇だっ！

私が静かに興奮していると、

気まずくて出てこれないんだな。ドック壊しちゃったし。

そうね、ちよっとお転婆さんね。ドック壊しちゃったものね。うふふ。

そのの二人っ！ナチュラルに中の人を煽らないっ！

ほら、なんか手ががぶるぶる震えだした。絶対聞こえてるよっ！

と、空気を読んだのか、例のアレがふわっと飛んで封筒を受け取ると巨摩の前に封筒を差し出した。選ぶのは巨摩だ、ということらしい。

ふわふわと宙に浮く封筒に、おおっ!?!と驚く巨摩。妖精がとってきてくれたのよ、と教えてやる。

恐る恐る受け取った巨摩が、ありがとな、と言うと、アレは、ほにやりと気の抜けた笑顔とともに綺麗なカーテシーを見せ、巨摩の頭の上に戻った。

やっぱり普通の妖精じゃないわよねえ、アレは。

UMAと言ひ、アレと言ひ、今日は面白いこと三昧だわ。

まもなく、かさかさ、と巨摩が便箋を広げる音が、静かな工廠に響いた。

そして、冒頭へと、続く。

招魂（後）

彼の手には便箋が一枚。

洒落た薔薇の透かしが入ったいわゆる透かし和紙で作られている、細かい意匠の凝らされたなかなかの逸品である。そこにはほんの一行、端正な字でこう書いてあった。

まきますか

まきませんか

さて、猶予もあまりなさそうだし。

せかすようにひらひらと踊る小さな白い手を目の端に映しながら、俺は愛用の万年筆を手に取り件の便箋に向き合った。

ちなみにこの万年筆は海軍士官学校の入学祝いにと二人の姉が贈ってくれたもの。明石姉カスタムメイドの一品ものでシンプルかつ美しい装飾とは裏腹に怪しげな機能が満載らしいが、怖くていまだに万年筆以外の用途では使ったことがない。艦娘が見れ

ば一目で明石・間宮謹製とわかる何かが施されているようで、俺に気安く接してくれる数少ない艦娘である大鯨さんに見せたときには、まあ！本当に愛されてるんですねっ！とニコニコ笑顔で言われた。

それはともかくつと。

そもそも、まく、というのが何のことなのかさっぱりわからん。巻く？ 蒔く？ これ明らかに説明不足と言えるだろう。そんな悪い設問にはこうだな、と便箋の余白にさらさらと言書き加えて封筒に戻し、目の前に差し出す。よろしく頼むよ、と虚空に声をかければ封筒はふわつと漂い、ドックから突き出す例の手へと渡された。

よくわからんが妖精つてスゲーな、と感心していると、なんて答えたのよ、いいからもったいぶらずに教えなさいよ！と明石姉が脇をつついてくる。ついでとばかりに間宮姉が反対の脇腹を撫で回してくる。

ん……。耳貸して。

こしよこしよこしよ。

え……。ていう残念な人を見る目をされた。まずったかな。

ずばあーん！

突然の大きな音とともにドックの蓋が勢いよく吹き飛んだ。

できるんだったら穴なんて開けないで最初からそれをやればよかったのに、という感想を抱きながら音のした方を見やれば、不機嫌そうに腕を組んだヒトガタのものがふよふよと宙に浮かんでいる。

ちよつと大きなお人形サイズ。透き通るような白い肌、ストレートロングの銀髪に深い紅の瞳。整った顔立ちだが少し険が強い。ゴスロリ調のドレスに黒いブーツをコーデイネイト。おしゃれさんだ。背中に立派な翼が生えてるけど、あれの力で浮かんでいるのだろうか。

一方で、完全にイカれてしまった建造ドックを目の当たりにした明石姉が、シヨックのあまりorzしながら滂沱の涙を流している。声も出ない様子だ。それを見た俺の胸にふつふつと怒りが湧き上がってくる。アイツ、明石姉を泣かせるとはとんでもねえ女だ。許さねえ。

「おばかさあん。本当におばかささんね。あなた？　こ・れ・は。これは一体、どういうつもりなのかしら？　答えなさい。」

アイツはまなじりを吊り上げて、手にした便箋を指でばんばんと激しく叩いている。そこには俺の筆跡で一言、こう書き加えられていた。

まけたらまいとくーwww

「まきますか、まきませんか、つて聞いているんだからどつちかを選択するでしょう常識的

に考えて。それを、まけたらまいとくー、つて。まけたらまいとくー、つて！ あなた、どこの三流バカ大学生なのかしら、それともパリピかなにかなのかしら！ 草生やしてんじやないわよっ!!」

相当ご立腹のようだが俺も負けられない。

「まきますか、まきませんか、つてそれだけで話を通じると思つてんのかこのコミュ障が。だいたい二択問題にしたきや、選んで○をつけよ、とか最低限の説明はつけとくもんなんだよ。コミュ障のヒツキーは社会の常識を勉強してから出直してきやがれ、コミュツキー女っ！」

どうやらこれはクリティカルヒットだったようで、ヤツの怒りのボルテージが一段階上がった。

「んなつ！あ、あなた…言つたわね。コミュ障つて…。コミュ障のヒツキーつて!!」
「あれれ？凶星だった？ ひよつとしておこ？ おこななの？ 乳酸菌、ちゃんどつてるうっ？」

乳酸菌は高血圧に効果があるのだ（個人の感想です）。

「クツ…！ い、言うに事欠いて私のセリフをつ…！ あ、ああああ、あなたあ。ちよつと屋上にいらつしやいな…ひさしぶりに…きれちやつたわあ…」

「まあ困つたわ。この工廠に屋上はないのよねえ。」

「な、なんですってえ!!!」

間宮姉から冷静なツツコミが入る。そうだけどうじやない。そしてそれを律儀に拾うコミユツキー。スルー力低いなコイツ。意外と根はいいやつなのかもしれない、と俺の中で好感度がアツプした。

「ぐぬぬ……! どいつもこいつも私をバカにしてえ! ああああああ
ああああああああああ!!!」

あ。マジギレした。

もはや言葉になっていない叫びをあげると、大きく広げられたヤツの翼から炎に包まれた無数の羽根が放たれた。弾幕のごとき凄まじい数と密度だ。

こ、これは拙いだろ。工廠だぞここ。羽根の勢い自体は正直たいしたことはないものの、火はマズい。これを放置しては工廠の神が荒ぶってしまう。とつさに脱いだ上着で羽を振り払いながら周囲を見回し、急いで消火器を探す。

「工・廠・内・は・っ!・火・気・厳・禁・っ!! うりやああああ!!!」

間に合わなかった。

安全? 第一の工廠ルールをいともたやすく破り捨てる行為に天罰を与えるため、悲しみを怒りに変えた明石大明神が立ち上がる。神はデカイ消火器を抱えて消火剤をぶちまけ始め給う。的確に消火しつつも、神は元凶であるコミユツキーを消火剤まみれにし

給うことを忘れない。

「ちよ、あつ、まつ！ あばばばばば！！」

消火剤直撃中のコミユツキーは喋ることすらままならない惨状だ。

可哀想に。神の怒りの鉄槌が振り下ろされてしまった。

ほぼ時を同じくしてそこかしこに設置されているスプリンクラーもまた火気を検知し、自動で消火剤の散布が始まった。

これはさすがに俺も明石姉も避けようがなく、スプリンクラーが停止した後には、消火剤まみれになったドロドロの三人が残されることとなった。特にコミユツキーはフリフリのゴスロリドレスに加え、下手に豪華な羽毛付き翼なんて装着しているものだから、もうしおしおのへなへなで床にへたり込んでいる。すべて自業自得とはいえ、実に哀れを誘う姿ではある。

一人足りないだろうって？

間宮姉はこういうとき大体いつも要領がいいから…、ほら、工廠の隅つこで傘を差しながらニコニコとこちらに手を振っている。ずっこいよなあ。

で、結局あのコミユツキーは何なんだ？ 新種の艦娘？ もしかして、アレが俺の

パートナーになっちゃうの？

俺はコミュツキーに目線を合わせるようにしやがみ込み、語りかけた。

「おい、コミュツキー。」

「さつきからなんなのよ、それ。」

心底疲れ切ったというような声でコミュツキーが答える。

「結局さあ、コミュツキーはここまで何しにきたの？」

「あなた、大体ねえ！ 私の名前はコミュツキーじゃない、す……ヒイッ！」

翼をもたげながらそこまで喋ったところで、コミュツキーの喉元にスツと牛刀が当てられる。間宮姉だ。同時にコミュツキーの後頭部を鷲掴みにしているようで、

「痛いっ！ 割れる、割れちゃう…いやあ!! ジャンクに、ジャンクになっちゃうからあ!!!」

と、この通り恐ろしい調教が進行中である。

間宮姉が耳元で何かをささやくと、目を見開いたままコクコクと頷きおとなしくなる

コミュツキー。

「コミュツキー、続きはっ。」

「ふん。もういいわ。あなたを私の養分にしてやろうと思つてたけど、やあめた。」

「養分?」

よくわからない。養分とはなんだ?

「わかつてないのね…あなた。まあいいわあ。それにあなた、もう随分と吸わ…ヒイッ! やめてやめていやあ!! ジャンクはいやあああ!!!」

容赦なく行われる調教行為にさすがに可哀想になつてきたので、間宮姉に頼んでやめてもらった。

「……ふう。もう散々。私は帰るわね。」

それだけ言うと、ふわりと浮かび上がるコミユツキー。翼はしおしおのままだがなんとか飛ぶことはできるようだ。俺をじつと見つめて、あなたやつぱり…、と何かを言いかけるが、間宮姉の一瞥を食らうときゅつと口を閉じた。

「もう二度と会うことはないと思うけれど…、死にたくなかつたら色々と頑張りなさい。じゃつ、ばあいばあい。」

「おい、帰るつて、どこに帰るんだつ!」

「あなたの知らないところ、よお。」

それだけ言うと、コミユツキーは工廠の開け放たれた窓からふらふらと頼りなさげに飛び去つて行つた。大丈夫だろうか、アイツ。そう心配に思いながら、小さな後ろ姿が

点となり、そして視界から消え去るまでじっと見届けた。

軽い溜息をついて振り返ると、二人の姉がたまに見せるビー玉のように無機質な瞳で俺をじっと見つめていた。

「さて、まずは掃除からかあ。あーあ。これ、復旧に時間かかりそうだなあ。」

とりあえずシャワーを浴びてさっぱりした後、明石はうんざりとした顔でポリポリと後頭部を掻きながらつぶやいた。一基しかない建造トックは大破、工廠内は消火剤まみれで、工作機械類は徹底した分解洗浄が必要になる。別棟の入渠室と工廠事務室が無事なことだけが救いだらう。

「まあまあ明石姉、俺も手伝うからさ。ちゃっちゃと始めようぜ。千里の道も一歩からって言うだろ？」

おなじくさっぱりしてきた巨摩が嬉しいことを言ってくれる。

あーん、もう巨摩つてば最っ高！

そう言っておちやらけたふりをして巨摩に抱き着けば、私の頭は彼の胸の位置だ。頭を押し付けぐりぐりすると硬い筋肉の感触。本当におつきくなつたなあという感慨と

ともに、思いつきり息を吸い込む。いつも通りのいい匂い。イレギュラー続きだった今日一日の疲れが魔法のように溶けていくのを感じる。ああ。私の居場所は巨摩の隣、ここなのだ。大事なこの場所を、あんなUMAやら、ましてや下劣な人間の女どもなんかには絶対に譲つてなるものか。

私の全部は巨摩のためにある。

私は、巨摩の艦だ。

結局、今日の騒動で俺の初建造は無期延期になってしまった。

建造ドックが大破してしまったのだから仕方ない。この件については、建造ドックの老朽化による損壊事故とそれに起因する工廠火災、ということでは明石姉が上に報告することになった。証人は間宮姉。この二人の連名であれば大抵のことはすんなりと通るらしい。これまで培ってきた信用、つてやつよ、ふふん、なんて明石姉は軽く言っていたが、あの二人は本当に大したものだと思う。

そうそう。二人には、コミユツキーの存在については口外無用、とそれはもう耳にタコができるほど言い含められた。なんでも建造であんなイレギュラーを呼び寄せたこ

とが明るみにできれば、俺が海軍研究所の実験動物にされかねないらしい。海軍研究所怖すぎだろ。

それと、建造できないということは、俺には当面パートナー艦がないということでもある。これから先の講義や演習はパートナー艦との協業が前提になっているものが多いので相当困ったことになるだろう。と思いきや、

「はいはいはい。お姉ちゃんの出番ね。臥薪嘗胆、面壁九年。ついにお姉ちゃんが目の見るときが来たんだわっ！」

建造できるようになるまでの間だけ、ということの間宮姉がやってくれるらしい。

厨房は大丈夫なのかと聞いても、伊良湖ちゃんもいるし大丈夫、あの子もそろそろ独り立ちの準備が必要なよ、と全く気にしている様子がない。

明石姉は通常の教官業務に加えて工廠の復旧作業もあるからちよつと無理、ということとで悔しそうにした。

気心が知れている相手なのは助かるけど、給糧艦がパートナーなんて俺だけだぞ。みんな駆逐軽巡、珍しいところで潜水艦なんだが。うまくやれることを祈る。

こうして、これからの学生生活に一抹の不安を残しつつも、今日の「第三種接近遭遇事件」（明石姉命名）は幕を下ろしたのだった。

建造って実際何をしているんだろう。

今日の出来事からふとそんなことが気になった俺は、もう一度学校の教科書を紐解いてみることにした。建造の項の冒頭にはこう書かれている。

艦娘の建造とは招魂と受肉の奇跡が核になっている、というのが一般的な解釈である。

奇跡とか。よくわからん、つてことなのだろうけど……招魂と受肉、ね。

過去に沈んだ艦に宿っていた神魂が現し世に招かれ再び形を持った、それが艦娘であるといわれている。前世で悔恨や未練を残す最期を迎えた魂は建造により招かれやすい傾向がある、という説もある。

コミユツキーもまた、いつかどこかで依り代を失った魂が招かれ、肉体を得てあの姿になったのだとすれば、前世での彼女の最期は……。

もう答えの出ることはない、そんな疑問をとりとめもなく頭に浮かべながら、そつと床につく。

寝入りばな。

枕元から、優しい子守唄が、小さく、小さく、聞こえてきたような、そんな気がした。

歪（前）

その日、ひよっとしたら運命の人と出会えるかもしれないじゃない。その運命のためにもできるだけ可愛くあるべきだわ。

— C o c o C h a n e l（ココ・シャネル）

明石はその日、運命を呪った。

綺麗な手で、優しい微笑みで、嫺やかな仕草で、甲斐甲斐しくあの子を世話する間宮の姿が脳裏に焼き付き離れない。

最近の威力偵察作戦では大破撤退が続いている。突発的な大規模夜戦もあった。これらにより工場の仕事は、消化よりも積み上がる方が多い状態だ。汗に塗れ、油に塗れ、草臥れたツナギを身に纏い、ひたすらに仕事をこなす。小さな泊地である。工作艦は明石一人。自分がやらねば誰がやる。誇り高き工作艦明石は工廠で一人、ひたすらに仕事をこなす。私だって、私だって、私だって。

私だって頑張ってるのに。どうして。

油と煤が染みつき薄汚れた両手。手弱女とはほど遠いそれをじつと見て。

誇り高き工作艦明石はその日、自分の運命を呪った。

「やあやあ。おつす、おーつす。明石っちー、順調〜？」

「北上さん、手伝って。」

「や。アタシこれから遠征なんだよねー、ぎーんねん。」

頭の後ろで両手を組みそう言い放つ北上。まったく残念ではなさそうな態度だ。背を向けたまま、チツと憚ることなく舌打ちをする明石だったが、そんなつれない態度など馬耳東風。今忙しいです、と全身で主張する明石の態度を気にするそぶりも見せず、いつものポーカーフェイスを浮かべる北上である。

「ほらっ、明石っちー。スマイルスマイル。笑顔は女の武器だって、大井っちが言ってたよ。」

にーっ、と両手で口角を吊り上げる北上の顔をちらりと見て、また背を向けて。まったく説得力がない、と明石は思った。北上がいなければいつも不機嫌をまき散らしてい

るようなあの娘のどこからそんな言葉が出てくるのか、と。そんな考え事をしながらも、高圧缶の整備に忙しく動く手は止まらなかつた。北上の言葉の説得力はともかくとして、この泊地の明石はめつたに笑顔を見せることがない異端の明石として知る人ぞ知る存在だつた。明るく澆刺、おしやべりで、人懐っこい。そんな一般的な明石観からは外れ、愛嬌もなければ素つ気もない。職人氣質なあり方がなぜかこの泊地の提督には刺さつたらしく、彼女は長く重用されていた。

「ねーねー明石っちー。例のあの子なんだけどさあ。」

そんな無愛想明石の背に、びくん、と力が入る。

人間観察が趣味のようなところのある北上である。明石があの子を大層気にかけていること、そしてそのことを無愛想な仮面で隠そうとしていることを薄々察していた。こここのころの明石は、そんな内心とは裏腹に工廠に籠りつきりで、あの子の見舞いに行つた様子もない。そんなだから、最新情報を届けてやろうとわざわざ遠征前に来てあげたのだ。

「ずいぶん元気になつてきてるよ。最初はもう生気が感じられなくてヤバいかなつて感じだつたけど。まあ間宮さん、べつたりで看病してたしねー。今朝は二人仲良くおてて繋いで散歩してた。いやあ、仲良きことは美しきかな。よかつた、よかつた。」

ふう、という深いため息とともに明石の背に籠つた力が少し緩むのを横目に眺めなが

ら、まったく素直じゃないねえという思いを隠し北上は続けた。

「それにしてもさあ、提督にはびつくりだよねえ。拾ってきた子をいきなり、私の養子にするっ！なんてさ。さすがにあの歳で独り者だと寂しくなるのかねえ、っておつとつと、しゃべり過ぎたか。」

いつの間にかこちらを向き睨むようにじっと自分を見据える明石。提督の養子という部分が気に食わないのか、重い威圧感を漂わせている。北上は慌てて口を噤むと心の中で小さく唱えた。

くわばらくわばら、艦娘の嫉妬は怖いねえ…。

明石にとって彼との出会いは歓喜、諦念、未練が入り混じったほろ苦いものだった。例のあの子。

明石繁忙の原因ともなっている先日の夜戦で拾われてきた男の子である。拾ってきたのは天龍率いる水雷戦隊。なんでも粗末な丸木舟とともに海上を漂っていたところを発見し保護したとか。月明かりのない新月の夜によくぞ発見できたものだ。外傷多数、意識不明の状態で泊地へと運び込まれて以来、間宮がほぼつきつきりで看病してい

たという。

そんな彼の容態が落ち着きを見せ始めた頃、泊地の全艦娘に召集がかかった。提督から重要な通達があるという。工廠で終わりの見えない仕事に明け暮れていた明石も、当然その対象であった。明石は、猫の手も借りたい状況だというのに何を、という微かな不満を飲み込み、着の身着のまま、つまり油と煤にまみれ薄汚れたツナギ姿で会議室へと向かった。化粧つ気もなく、なんなら頬には一筋の油汚れまでついている。それはいつも通りのことであつた。そうやって一心不乱に頑張つてくれている明石あつての泊地であることは艦娘たちも提督もよく理解しており、明石の身だしなみに眉を顰めるような者はそこには誰一人としていなかった。

— まあ艦娘と女提督しかいない辺境泊地だもんねー。

— ん。そういうこと。

合流した他の艦娘たちといつも通りの軽口を叩きながら会議室へ向かった。

泊地で一番大きい会議室、入室すると自然と前方が目に入る。

そこに明石の運命が、居た。

白いベッドの中、小さな男の子。

寄り添い優しい気に声をかけている間宮。

その隣に提督。

ああ、と明石は内心で歓声を上げていた。いや、声に出てしまっていたかもしれない。その声が周囲の注意をひいてしまっていたかもしれない。だがそんなことが気にならないくらい明石の意識は集中していた。男の子の姿に。

艦娘には受肉しヒトカタを得た理由を悟る瞬間が稀にあるという。それは爆発的な喜びや充足感を伴うそうさ。たとえば強大な姫級ネーデルと対峙した瞬間、たとえば比翼連理となる提督を見つけた瞬間。

明石にとつてはまさに今がそれだった。

自分はこの子を支えるために生まれたという直感めいた何かが急速に心に沸き上がった。なぜこの子か？ 本当にこの子か？ 普通はあるべきそんな疑心は微塵も浮かばなかった。問宮へと向けられていたその子の視線がふと自分へ向く。小さく微笑んだ気がする。確かに明石わたしを見た。それだけで明石の胸は歓喜に満たされた。

その子の視線がゆつくりと問宮へと戻っていくのを惜しみ追いかけて、明石のそれも自然と問宮へと向けられた。問宮の白魚のような綺麗な指がその子の頬を撫で、慈母のようになんげな微笑みをその子に向けるのが目に入ったとき、明石はすべてを理解した。彼女も自分と同じものをあの子に見出しているのは一目瞭然だった。問宮は今、自らの持つ魅力を全身から滲ませるように輝いていた。それに比べて今の私はどうだ。薄汚れ油染みが浮きくたびれたツナギ姿も、化粧も忘れたこの不貞腐れたような仏頂面も、

あの美しく輝く間宮に及ぶべくもない。あの子の隣に立ち、あの子と共に歩む。間宮と明石のどちらが相応しいかなんて最初から決まっていた。明石はそう自己完結すると己の運命を呪った。こんなみじめな思いをするくらいなら、あの子を見つけないければよかった。項垂れながら強く握りしめた手に感じる機械油の滑りが忌まわしかった。間宮のようにあの子の頬を撫でてよい手だとは、どうしても思えなかった。

その日、明石はそれ以降の話をよく覚えていない。あの子の紹介があつたような朧げな記憶は残っているが、気づいた時には自室で一人、枕に顔を埋めていた。

「コマ……」

ただ、あの子の名前だけが耳の奥に染みついて離れなかった。

「それで、北上さんは……」

「北上さんはあの子のこと、嫌じゃないんですか。」

そんな出来事以来明石は、コマを避けるようにいつそう工廠へと籠るようになっていたが、だからといって孤立しているという訳でもない。工廠を訪れる艦娘たちとはそれまでと変わることなく世間話を交わしていた。そこから聞こえてくるコマの評判は決

して芳しいものではなかった。

曰く、間宮さんを独り占め。甘味処の休みが増えた。恨めしい。

曰く、近くにいるとどうも嫌な感じがする。近寄りたくない。

曰く、自分の妖精さんがあの子に吸い寄せられる。なにあれこわい。

聞く限り間宮以外の艦娘には大層受けが悪いようだ。天龍たちに拾われる前はいつも一緒にいたという野良艦娘は姿を消しており、提督の発表では、沈んだものと思われる、とのこと。そんな状況ではさぞ居づらいことだろうと心配していた。そんなコマの近況をわざわざ話題にもつてくるあたり、北上はひよつとしたら違うのではないか、とささやかな期待を持って質問を投げかけた。

「アタシ？」

しばらく間をおいてから、北上は溜息とセツトで少し気まずそうに問いに答えた。

「んー、アタシも近寄りがない派、かなー。あの提督が養子にするなんて言うくらいだから悪い子じゃないんだろうとは思うけど…なんか違うんだよねえ、相性つてやつなんかねえこれは。うん。」

期待外れの回答に、いつも以上にむっすりとした様子を見せる明石の機嫌を取るように北上は話を切り替える。

「あーそうそう。あの子、拾われる前の記憶がまだ戻ってないみたいだよ。覚えてるの

は名前だけだった。コマ。独楽？巨摩？まあいつか。なんだかちよびつと可哀想だよねえ。」

記憶が戻らない？ そんなの知らなかった。なんてことだ。ちよびつとじゃないだろう。それはどれだけ心細いことか。明石は胸の奥がムズムズとするのを感じた。

「それにさ、明石つちも知ってるよね。あの子、間宮さんと提督以外に相手してくれる人、いないみたいなんだよねー。まあ提督はよく間宮さんに追い払われてるんだけどね。」

「アタシにはどうも無理っぽいんだけどさ、でもせめてもう一人や二人くらい相性のいい人がいてもいいんじゃないかなーなんて、北上さんは思うわけですよ。」

胸のムズムズが加速する。

間宮だけじゃない。私だって少しはコマの力になれるんじゃないか、いや、今こそ力になるべきではないか、そんな思いが頭をもたげる。未練だ。コマには間宮がいる。北上にうまいこと乗せられてるのはわかってる。でも悪い気はしない。

会ってみるくらいいいじゃないか。一言、二言、励ますだけでも。今度はちゃんと身だしなみを整えて、見苦しいと思われぬように。そうだ、明日にでもまずは間宮と話をしてみようか、と心を固め顔を上げた明石の眼を覗き込むと、うんうん、と二回、北上は頷いた。

「さてと。北上さんはそろそろ遠征ですよーっと。じゃーねー明石っち。」

それだけ言うのと、北上は軽やかに去っていった。

明石の胸で燻ぶり続けていた熾火がこの時、小さくとも確かな決意となり燃え上がった。

「ねえ天龍ちゃん。私たちが拾ったあの子ってやっぱりあれよね、あの野良艦娘と一緒にいた子。」

「ああ、間違いねえな。こないだ提督も言ってたじゃねえか。対象を保護できたから救出作戦は中止にするってよ。俺はまだまだやり足りねえんだが損害が大きい作戦だったしな、中止は仕方ねえ。」

「はいはい。」

「でも拾った時、あの子は一人だったのです。野良艦娘さんはどこに行っちゃったのです？」

「あの子を捨てて島を出て行った、っていうのはなさそうよね。」

「そりゃあ一番ねえだろ。あんだけいつも仲良さそうにしてたしな。」

「言いにくいことだけれど、沈んだんだと思うよ、状況的に。あの子の乗っていた丸木舟には艦娘サイズの曳航索がついていた。」

「雷もそう思うわ。あの「例の島」からあそこまでヒトの子の力で漕いでいくのはちよつと難しいんじゃない?」

「なのです」

「ん?なんだなんだ。私の可愛い息子の話か? そうだな? そうなんだな?」

「うおおおおつ! どつから生えてきやがったこの提督っ!」

「どこからでも生えてやるさ、我が子の為ならな。フフツ。」

「親バカ提督がまた聞きつけてきたのです。話をすれば提督の影、油断ならないのです...」

「まあ待て。随分とつれないじゃないか、電。」

「つれなくもなるのです。突然あの子を養子にするなんて言い出した時には正気を疑ったのです。」

「そう言うな。私もこういう仕事だからな。若いころから戦場を転々とする日々で、この歳まで子どもなんて接点もなかったし考えてもみなかった。でもなあ...。意識の戻った巨摩に会って、記憶がないことを知って...。天涯孤独な身の上のあの子に縋るよ。うな円らな瞳で見つめられたときにな。こうビビツと来たんだよ。わかるだろう? 可

愛いよなあ、巨摩は。もうな、いい歳したオバサンのな、胸のこの辺がな、キュンつてした。ああ、私の下に天使が舞い降…「ちよつと提督をお借りしていきますね」

「うがつ、ちよ、待て大淀っ！首はっ、首はだめだろう！いい、息、が…。」

「うふふ、提督？ お仕事はこちらですよ？」

「ア…ア…。」

「…。」

「容赦ないわね、大淀さん。雷も少し見習った方がいいのかしら…。」

「おすすめはしないよ。雷には似合わない。」

「俺も同感だ。まあ提督は置いといてよ。あの子を拾った時の紫の光の柱、ありやいたい何だったんだろうな。龍田、わかるか？」

「遠方の海上に淡く輝く光の柱。その下にたどり着いてみれば傷を負った子どもが一人海上を漂っていた…。よくわからないけど、神秘的ではあるわねー。」

「あれは絶対に確認するべきだって電が言い出した時は俺もどうしたもんかと悩んだだけだよ…。結果を見てみりや命をひとつ救うことができた。電のフラインプレーだったな。」

「不思議な光だったのです。助けに行かなきゃやって直感したのです。あの光に導かれて一人の子を助けることができた。本当に、本当によかった…。」

「神秘的な光が指し示す子供、か。ありやあ冗談抜きで天使だったのかもしれないな。って、俺らしくもねえか。ははっ。」

「アレは…。あの子は天使なんて上等なものじゃない、と私は思う。むしろアレは…何か…。」

「あらら？ どうしたの響ちゃん？ 眉間に皺が寄ってるわあ。」

「すまない。でもアレは私たちとはどこか違う…、と思う。」

「んー、どこか違う感じがあるっていうのはそうかも。」

「雷もそんな感じはするわ。でも嫌いつてわけじゃ、ないのよ？」

「なの、です…。」

「まあ俺も、な。いいじゃねえかそれでも。広い世の中俺たちとそりが合わねえヤツだって少しはいてもおかしかねえだろ。敵じゃねーんだ。お互いぶつからないように気を付けときやそれでいいんじゃないのか？」

「「……………」」

「な、なんだよ。」

「また天龍ちゃんがまともなコト言い出したわあ。」

「疲労の溜まっている艦は休ませよう。」

「天龍さん、大丈夫よ。あとは雷に任せてっ！」

「そろそろ寝た方がいいのです。」
「どうせ俺は……くすん。」

歪（後）

胸に灯るこの火が消えないうちに、と明石は動いた。

北上との会話から間もなく、間宮と約束を取り付けた。巨摩に近づくと提督を邪険にあらわしているという話だったので会わせてもらえるかと少々構えていた明石だったが、まあよかつたわ、と喜ぶ間宮の顔には特段含むものも感じられず、ほっと胸をなでおろしていた。

そして数日後、いよいよ巨摩と対面する日がやってきた。明石にとっては仕切り直しとなる二度目の運命の日である。

明石は前回のようなことはないよう、入念に準備した。

仕事は気合で片づけた。朝から風呂に入り入念に全身を洗い上げた。長い年月をかけて爪の間に染み込んだ機械油の黒ずみは、自分の生き方そのもので完全には落とせない。それでもできる限り綺麗に洗い落した。髪には丁寧に通し、普段はしない化粧も嫌味にならない程度に薄く施した。服装も艦娘明石の正装を久しぶりに身に着けた。自室の姿見の前で入念に身だしなみをチェックし、それでも少々早い時間だったが、居ても立ってもいられずに部屋の外へと飛び出す。見慣れない明石の正装にすれ違

う艦娘たちがぎよつとした顔をするのを少し面白く感じながら艦娘寮を歩き、勢いのままに間宮の部屋のドアを叩けば、すんなりと迎え入れられた。

「こんにちは、間宮さん。ちよつと早かったかな。お休みの日に無理を言っちゃつてすみません。」

「いいのいいの、むしろ大歓迎。巨摩ちゃんも楽しみにしてたんだから。ね？」

間宮の背に隠れていた巨摩がひよつこりと顔だけを出す。明石を見つめる瞳の色は期待半分不安半分というところか、大分緊張している様子だ。と考えていたら、すぐに間宮の背に隠れてしまった。

「まーちゃん……。」

間宮に助けを求める小さな声は、明石の胸に灯る火に油を注いだ。どうやら間宮はまーちゃんと呼ばれているらしい。親密な関係が窺われる。うらやましい、と明石は思った。間宮は、ごめんなさいね、と苦笑交じりに背中に手を回すと隠れる巨摩を引っぱり出す。

「はい、ごあいさつ。練習したじゃない。できるわね、巨摩ちゃん。」

「うっ……。田中巨摩、です。お母さんは田中提督です。」

私だつて昨夜は散散練習した。子どもを怖がらせない優しい言葉遣い。その成果を見せる時だ。明石は表情筋に過去最高の仕事を要求した。うまく笑顔を作れているだ

ろうか、そんな不安を抱えつつ右手を差し出し、練習した通りに口上を述べる。

「こんにちは、巨摩。私は明石お姉ちゃん、です。ここで工作艦をやつてます。工作艦っていうのは、みんなの装備とか色々なものを作ったり、修理したりするお仕事。」

「明石お姉ちゃん。」

「ごめんね、きれいな手じゃなくて。お姉ちゃんは機械をいじる仕事だから…。こんなお姉ちゃんだけお友達になつてくれるかな？」

明石の胸は激しく早鐘を打っていた。不意の戦闘に巻き込まれた時のことを思い出した。いや、あの時でもここまでひどくはなかった。手汗かいてないかな、大丈夫かな。もう限界だ、このままでは心臓が破裂してしまう、さあ一刻も早くこの手を握つてくれ。そんな明石の願いが通じたのか、おずおずと差し出される小さな手が、きゅつ、と明石の手を握った。この時明石のハートも一緒にわしづかみにされていたのだが、巨摩本人はそんなことを知る由もなく不安げに尋ねた。

「お姉ちゃん。僕のこと、嫌いにならない？」

間宮は思慮深い艦娘だ。今までだつて機会をつくり艦娘と巨摩との交流を試みていたことだろう。そのたびに艦娘に忌避されて、それを繰り返すうちにこんなにも自己肯定感が下がってしまった巨摩。これからは私がこの子のすべてを認め、受け止め、守るのだ。甘く心地高い高揚感に満たされた明石は、そつと巨摩を抱き寄せた。

「大丈夫だよ、嫌いになんて絶対ならない。だからこれからよろしくね、巨摩ー」
ばんばん。

一件落着とばかりに軽やかに手を鳴らし、それじゃあお茶でも入れましょうか、と言う機嫌よさげな間宮に促されるままソファーへ腰を沈める二人。もともと相性はよかつたのだろう。いわゆるラブソファー的なものに二人並べば、お互いに打ち解けるのはあつという間だった。

間宮の入れてくれるお茶を飲みながら、用意されていたのだろう色とりどりのお菓子を食べ比べ、これが美味しい、こつちも好きとお喋りをして。

ここぞとばかりに工作艦技能を發揮する明石により次から次へと魔法のように作り出されるおもちゃに三人で歓声を上げ。

気が付けば巨摩から、あーちゃん、と呼ばれるようになり明石はご満悦だった。

楽しい時間はあつという間に過ぎ、今、ソファーに並ぶのは間宮と明石。巨摩はといえば、はしやぎ疲れたのか二人の膝の上で愛くるしい寝顔をさらしていた。明石の妖精も間宮のそれと一緒にたくなって巨摩の周りで眠りこけている。他の艦娘のいう嫌な感じとは何なのか、ついぞ明石には理解できなかった。ただただ楽しく充実した時間で、巨摩を当然のように受け入れてくれた自分の妖精たちを誇らしく感じていた。

「このソファー、いいでしょう？」 巨摩ちゃんが泊地うちに来てから買ったの。」

「あはは……。私なんか隣りに座っちゃってスママセン。」

「いいのよこれで。ううん、これがいいの。私たち二人と巨摩ちゃんの三人一緒で、一番いい使い方。明石ちゃん、ありがとう。私以外にこの子の味方になつてくれる娘が見つからなくて少し不安だったんだけど、本当によかった。」

三人一緒。

その言葉は明石の腹にすとんと落ちた。

間宮と明石のどちらが相応しいかなんてこと、間宮は最初から考えていなかった。これから先、あの子の艦娘は五人になるかもしれない。十人になるかもしれない。ヒトである提督は別にして、それでも全員であの子を支えていけばいい。それだけの話だったのだ。勝手に劣等感を抱いて、勝手に諦めて。明石は少し前の自分を心底恥ずかしく思った。

「だって、あなたも私と同じでしょう？ この子は、巨摩ちゃんは私たちにとつて特別。給糧艦間宮と工作艦明石にとつて特別な人。違つた？」

「ああ、やっぱり間宮さんもわかつてたんだ。特別。そう、ですね。巨摩を初めて見た瞬間、何かこう運命みたいなものを感じました。今日巨摩に、おもちゃが出てくるあーちゃんの手は魔法使いの手だ、つて言われたとき、本当に嬉しかった。私が私でよかつた、つて思いました。油が染みついて落ちない、こんなくたびれた手でも巨摩に喜んで

もらえる、って。」

「あら、私も、お菓子が出てるまーちゃんの手は魔法の手、って言われたことあるのよ。うふふ。私たち魔法使い二人はこれで同志ね。これからよろしく、同志明石ちゃん！」

「こちらこそよろしくお願いします、同志間宮さん！」

「泊地うちちに伊良湖ちゃんが居れば彼女も同志になつてくれたのかもしれないって感じるけど……居ないものはしょうがないわね。ねえ明石ちゃん。早速相談んだけど、まずは私たち、同室にしてもらうっていうのはどうかしら？」

「そう、ですね。三人の時間を増やせていいなーって思うんですけど、提督がなんて言うか……。」

「そこは私に任せておいて。提督にオネガイしておくわ。」

間宮明石を同室に変更する件はほどなく承認された。

魔法使い二人の前途には洋々たる未来が待っているように思えた。

だが、巨摩との別れが思いのほか近づいていることを、二人の艦娘はまだ知らなかった。

静まり返る深夜の執務室。そこで提督は悩んでいた。

巨摩を自らの泊地に受け入れてから半年がたつ。戸籍関係の手続きは、本土との距離の関係で時間はかかったが無事完了しており、提督と巨摩は正式な親子関係となっていた。戦地にひとり骨を埋めるものとすっかり覚悟を決めていた彼女に突然できた一人息子。一目惚れからそのまま突っ走ってここまで来た形だが、彼女に後悔はなかった。むしろあの子がいることで日々が充実しているといつてよい。自らの胸のうちに突然芽吹いた母性というものに新鮮な驚きと喜びを感じながら、少しずつ巨摩との距離を縮めていく生活。時には同僚に祝福とからかいを受け面映い気持ちになることもあるが、それも幸せの一部というものだろう。

提督は当初、例の島からの巨摩救出は未発見海外艦娘獲得の隠れ蓑程度に考えていた。件の海外艦娘は消息不明推定轟沈と、詳細が不明なままついに手に入ることはなかったが、そのことへの執着はもうなかった。巨摩を救うことができた。それで十分である。天龍艦隊が巨摩を見つけられなかった世界、巨摩が命を失っていた世界。それを想像し身震いする程度には、提督は巨摩を愛していた。

だがしかし。

この泊地の艦娘の多くは巨摩のことを避けていた。これが目下の悩みのひとつであ

る。具体的には間宮と明石を除く全員が、何か異質なものを見るような目で遠巻きに巨摩を眺める。当然そこには交流など生まれようもなく、巨摩の世界はいっこうに広がりを見せない。小さいとはいえ、この泊地には五十余名の艦娘がいるというのに。

一方で、何故か間宮と明石の二人だけは別だ。巨摩にベタベタの甘々である。提督に勝るとも劣らない溺愛ぶり。狭すぎる巨摩の世界を広げることなく、ただひたすらに深く深く、せつせと掘り進んでいる。提督業は基本ブラツクだ。一日のうち提督が巨摩とのふれあいに割ける時間はごくわずか。それを補い巨摩の面倒を見（まくつ）てくれる二人に感謝はしているが、ちよつと補いすぎにもほどがあるのではなからうか。母子の時間とかもう少し欲しいんだが。そう提督は考えていた。

不干渉と溺愛。巨摩を取り巻く小さな社会は両極端で歪だ。この環境が巨摩の情操教育によい影響を与えるものだと、彼女には到底思えなかった。この悩ましい状況はどう打開するか、実は彼女には一つの腹案があった。あるにはあったが、それを実行すべきか決めあぐねていた。

「提督？　なにか悩み事ですか？」

「ああ。ちよつと巨摩のことで、な。」

本日の秘書艦を務める大淀の問いかけに、お前も原因の一人だぞ大淀、と内心苦情を申し立てながら答える提督。

「巨摩君、ですか。」

無機質にそう言う大淀の表情は波一つない風の海面のようで、感情の揺れというものがまったく見られなかった。これで気まずそうな顔の一つでもしてくれるならまだ希望があるのだが。まあ話すだけ話してみるかと提督は続けた。

「巨摩を迎えてから半年、この泊地で巨摩と交流があるのはいまだに私、間宮、明石の三名だけだ。この状況は巨摩のためにはならんと思っている。君はどう考える？」

「そうですね。いやがらせやいじめなどはない様ですが、おおむね提督のご認識の通りかと。」

言葉に温度が感じられない。大淀は不干渉く無関心ポジションらしい。淡々とした受け答えからそう判断しながらもう一步踏み込んでゆく。

「そこで、だ。あの子を本土へ移してはどうかと考えている。」

大淀の表情が初めて動いた。ぎよっとした顔をしている。

「それは…提督が本土への異動願いを出す、と？」

「さすがにそこまでは考えていないから、そんな顔をするな。なに、私は一応呉に家を持つていてな。管理会社に丸投げしたままずっと空き家にしてるんだが、そこに住んで普通の子のように学校に通えば、同年代の友人もできてあの子のためになるんじゃないかと、な。」

「しかし呉で一人暮らしというのは、あの歳ではまだ難しいのではないですか？」

「そこは考えがある。呉には予備役の間宮と明石がいるんだ。幸いあの二人には個人的な伝手があるから、住み込みで世話役を頼むつもりだ。ウチでも間宮と明石はあの子と仲がいいだろう？ それならあつちの二人でも大丈夫なんじゃないかと思つてな。」

「そういうことですか。呉にいる予備役の間宮さんと明石さん……。ああつ！もしかして、あのお二人ですか!? 提督、見かけによらずすごい伝手をお持ちなんですわっ！」

「そうだ。『最初の』が頭につくあの二人だよ。伝手に関してはまあ、腐つても中将、ということだ。予備役の艦娘を動かすくらいは問題なくできる。」

地が出ると一言余計なんだよなあ、大淀つて艦は。見かけによらず、じゃないだろう。とあきれる提督と、考え込む大淀。

「ウチの間宮さんと明石が納得してくれるかは少々不安ですが、提督のお考え、承知しました。総合的に考えて巨摩君と泊地のために一番よいかと思います。」

巨摩君と泊地のために、ね。

大淀の奴も今のままでは泊地にも悪影響があると考えている、ということか。大切な自分の家族がそのような立ち位置になってしまつて、ということについて忸怩たる思いはあれど、客観的に判断するならばこれに同意せざるを得ない。そこまで考えて提督は決断を下した。

「そうだな。まずは巨摩の意思を確認してからにはなるが、その方向で進めるべきか。率直な意見をあげがとう、大淀。」

「いえ、巨摩君を支える力となれず申し訳ありません。」

「私の方こそ氣を使わせて済まなかつたな。私は今もこれからもこの泊地の提督だ。私情に振り回される愚は冒さないつもりだよ。これからもよろしく頼む。」

「ありがとうございます、提督。」

「細かい準備の方は追々指示を出していくから大淀も力を貸してくれ。」

間宮と明石の二人は…あまりいいやり方ではないが、外堀から埋めていくしかあるまい。一時的な帰国ということにして全員に到達。まずは泊地の雰囲気固める。個人的には残念なことではあるが、大多数の艦娘は賛成するだろう。二人だけでは反対の声を上げにくい状況をつくることから、だな。」

「それが一番穏便で確実かと。ならば私は…」

……

…。

こうしてこの泊地のトップ2である二人の密談は続き、巨摩の本土移住計画が動き出したのだった。

提督は巨摩にすべてを包み隠さず説明した。巨摩にまで隠し事しておくのはさすがに情が許さなかったのだ。

今の状態は巨摩にとつても泊地にとつてもよくないこと。

本土で沢山の友人を作つてほしいこと。

済む場所は母が昔住んでいた家であること。

離れ離れになつても提督と巨摩との親子の縁は続くこと。

間宮と明石には移住の話は秘密にしておいてほしいこと。

巨摩とじっくり話をしてみてわかつたことだが、彼は自分の置かれている状況を驚くほどによく、そして客観的に理解していた。彼自身も艦娘たちとの関係改善が見込めない状況に苦しさを感じていたことを、つたない言葉でぼつりぼつりと話してくれた。それ故か彼は移住に対しかなり積極的だった。新しい環境でも「別の」間宮明石が待つていてくれるという説明も後押しになつてゐるらしい。

とにかくこれで障害たりえるものはなくなつた。

それからさらに半年。ついに巨摩を送り出す日がやってきた。

ここまで準備に時間がかかったのには理由がある。巨摩を安全に本土まで送り届けるルート確保である。このご時世、ヒトと深海種の間での制海権、制空権の奪い合いは一進一退であり、状況は目まぐるしく変化してゆく。万全の護衛体制と安全なルート選定、通信網の確保などなど、提督は安全確保に心血を注いだ。

実のところ、今回の移動プランはとある少将の本土異動への便乗である。さすがに巨摩専用便を立てることは不可能に近く、これも時間を要した一因である。こちらまで少し寄り道してもらって巨摩をピックアップ。あとは点在する各泊地間を航空機で結びながらの移動が基本となる。それでも護衛艦娘の引継ぎの都合などで各泊地に数日逗留することも多く、本土到着まで半月ほどの旅路となる予定だ。遠方の泊地から本土へ行くこととするとどうしてもこういう大掛かりなことになるため、泊地の提督たちが本土へ赴くことは滅多にない。タイムリングを計り今回の便乗を上手くまとめられたのも提督の愛のなせる技であつたといえよう。

各地の護衛にはできる限り自分の知る信頼できる最高の艦娘を手配し、息子をよろしく頼むよ、と念を押した。

龍驤

「キミの息子お？ ほおーん、それでウチに期待しとるんやな。まかしとき、やったるでえー！」

瑞鶴

「えー、護衛？ 提督さん子どもいたの!? まあ？ 愛する息子の護衛艦としてこの瑞鶴に目をつけるとは中々の慧眼ね。大船に乗ったつもりでまかせといて！」

瑞鳳

「提督、久しぶりですね！ へー、そういうことなら瑞鳳頑張っちゃいます！ 息子さんは玉子焼き、好き？ いっぱい用意しておきますねっ！」
などなど。なんととっても空の護衛は空母様々である。

もはや人事は尽くした。あとは送り出すだけである。

上空にはすでに多数の護衛機が旋回しているのが見える。泊地唯一の正規空母、翔鶴の艦載機が最初の中継地までを担当する。

「巨摩ちゃん。はいこれアイスよ。溶けないうちに機内の皆さんで分けて食べてね。こっちは羊羹。経由地の分だけ用意したわ。日持ちするものだから大丈夫。ちゃんと

ご挨拶してから渡すのよ。あ、最中も持っていく？持っていくわよね。」

「巨摩っ！ 戦闘糧食は持った？ あと応急修理女神、忘れず連れてきなさい。あとあと、これはどこの泊地のアイテム屋でも使えるプリペイドカードだから、なくしちやダメだからね！ いい？ 調子が悪かったらすぐに近くの明石わたしに修理してもらいなさい！」

「早く帰ってくるのよ。」

「まーちゃん、あーちゃん、もう持てないよ…。」

未だに一時帰国だと信じている間宮と明石が巨摩との別れを惜しむ一方で、提督は便乗させてもらうことになる少将に、くれぐれも巨摩のことをお願いします、と挨拶をしていた。

「いやはや、まさか田中中将のご子息と同乗することになるとは。光栄です。」

「手のかからない子ですが、道中よろしくお願いしますね。」

「こちらこそ。この老骨も本土に戻ればまもなく引退。なに、ご子息はこの命に代えても無事本土まで送り届けますよ。」

そろそろ時間です、と大淀が離陸準備が整った旨を告げる。

提督は最後に我が子と抱擁を交わすと、行ってこい、と短い一言に万感を込めて小さな背を押し出した。

巨摩を乗せた機体は蒼穹へと舞い上がり、あつと言う間に彼方へと飛び去って行く。
さてさて、あの二人にはこれからどう説明したよいものやら。

涙を流しいつまでも空を見上げ続ける間宮と明石の姿を目の端に入れながら、提督は
ぼんやりとそんなことを考えていた。